

---

# 彼とあたしとワイシャツと。

あずまひとみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼とあたしとワイシャツと。

### 【著者名】

あずまひとみ

### 【あらすじ】

いつもの通学路、いつもの通学風景。風景の一部だったは  
ずのその人に、ある日あたしは水をかけられた。…これから学校な  
のに…どうしてくれるのか、もつ…

ここ。出合いは水も滴るイイ女？

少し気付いてくれるだけでよかつた。

じつと眺めていただけの「」の生活に

知らずに飽きていたのかもしれない。

八月。濃い緑色の葉がつよこ田ぞし日曜日をわてきいろりと輝いて  
いる。

プールに向かう親子連れも多く、公道はにぎわっていた。

いいな。楽しそう。

あたしはその中を、「スマセン、スマセン」といながらすりぬけていく。

毎日のよひに通る車屋さんの前。

おー・今田せいやーひーるやつへる。

若い男の人気が、水まきを。  
バシャッ。

「え」

といじのがどうしたものか、その人が水を巻く瞬間と、あたしが前を横切る瞬間のタイミングが、ばっちりあつてしまつた。

「うわ…これから学校行かなきゃいけないのに…」

制服はびしょびしょで、すでに学校に行けるレベルじゃない。

ああ…。

この気持ちをどう表そつか…！

憤慨するあたし

「すみません…大丈夫?」

水をかけた本人であるその人が、そばに来てそう言つた。一二十歳前後の、わりと整つた顔をしている男の人だつた。

思わず一瞬、じきりとする。

「うわの店で乾かしてつたらいいよ」

染めていない若干長めの綺麗な黒髪をかたむかせて、彼は言つた。

「じゃあ…お言葉に甘えて」

「ままじゃビリにも行けないし…。そつよつかな。」

あたしは案内されるがままに後についてった。

店内に入つてみると、そこは思ったよりも綺麗な場所で。

並べられたショーウィンドウの車。やわらかいライトアップ。

へえ…車屋さんて、こんななんだ。

そり、ちょっとばかしイメージを改めたんだ。

「じゅうち

誘導されるがまま、従業員用の通路を歩く。

道中　　彼は一度も、こちらを見ない。

会つたばかりの人なのだから、当たり前といわれれば当たり前。

でもどうしてか　　あたしは、そのことに寂しさを感じてる。

自分でこの感情を何というのか、名前など付けられないまま  
気がついたときには、従業員用の更衣室に通されていた。

「着替え、ここに置いとくね。僕のワイシャツだから少し大きい  
と思つけど」

そう言って差し出されたのは、2Lのシャツ。

細身の割に大きいサイズに、妙にときめきを感じた。

これに着替えればいいわけね。

「何から何まで…ありがとうございます」

「つぅん、僕のせいだから。それより」

早く着替えて。

最後に、そう呟いたのは、気のせいだっただろ？

氣ままずそうに田線をずらして言つた後、彼は部屋を出ていった。

…え～？なになに？

最後のなに？田も合わせないで。

着替えようとブラウスのボタンに手をかける。

…これが…………

あの人気が田逸らしてた理由、分かつちゃった。

…水で下着が透けてたんだね。

「でも、年上なのに…」

やば、可愛い。

自然に笑い声がこぼれてしまった。

つてえ！そんなことより着替え着替え！－！

と、そのとき。

ドンッ。

「はつーーー？」

ななななななにーーー？

怪奇現象！？ポルターガイスト！？

今、入り口のドアひとりでに鳴ったよねえ？

ビーピるあたしをよそに、それ以降、一度もドアは鳴らなかつた。

なんだつたのだらう。

「あ、あの…終わりました」

着替えおわつて、ドアを開けて後向きで待つてた男の人、恐る恐る声をかける。

「ああ…お疲れさま」

だけど、そう言ひ彼のほつがあたしには疲れて見えていた。

なんか、呼吸乱れるし。気のせいですかね？

「サイズ大丈夫だつた？」

「はつーえつ、ええなんとか！」

…いきなり話しかけるから、変な声が出てしまった。

「髪…まだ少し濡れてるね」

一人、「」のように呟いて彼はあたしの髪に触れる。

~~~~~ツツ！……！

近い近い近いつて！…！

けど、苦節十六年。

男慣れしてないあたしはなんにもできずに固まつた。

…我ながら純情だと思ひ。

彼は、まだ触つてる。

…黙れあたしの心臓。

ひとつ分うえにある（そして今はかなり近い！）彼の顔を、  
そつと見つめてみた。

…綺麗。本当に、男の人？

格好いいわけじゃない。

可愛いわけでもない。

ただ

綺麗。

「この畠葉に吹かれる。

なんていうか…パーティの一いつつが整ってんのよね。

…………。

「ドライヤー」

…はつ？

「ドライヤー、要る？」

ええ？

「髪…」

ああ…髪ね！

危ない危ない…見とれてた。

「いっ…いーですッ！大丈夫ですから！」

「えつ、でも自然乾燥は髪に悪

「ホントに…大丈夫ですか…！」

てゆーかこれ以上あなたと居たらあたしの心臓が大丈夫じゃなくな  
りますからッ…！」

「…いいの？本当に？」

「はいあたし自然乾燥大好きなんでっ」

…意味分からない！

「そりなの？じゃあ良いかな」

納得しちゃうの！？

「出口まで送るよ」

…天然ですかね？

「うしあたしのつらくも甘ずっぱい時間は、終わりを告げた  
のだった…。

「じゃあ…本当に」めんね。気をつけて」

「はい…」

あーあ…行かなきやいけないのか…。

何というか…

離れがたい。

道路上に面した場所で別れの言葉を口にする。

「あ、あのー、

けどあたし、このままじや終われないーー！

「連絡先…教えてもらひたいんですけどーー？」

「え」

せりーーー、諒しんでるーーー。

「やの…ワイシャツ、返せなことになーこー」

とつれて出したのせいかんな理由。

…別に変じやないよね？返せなことになーいのは嘘じやないし。

「シャツなんて…別にもらひてくれても

もひつ……ーー？

…それもそれでおこしいかも。

じゃなくてーー！

「ダメですそんなのーー。お借りしたものは返さないと困ることーー。」

シン…ヒー瞬の沈黙。

「…ふつ」

え？

「はははつ」

「…何ですか？」

「君、見た目に似合わず結構律儀な性格なんだね。びっくりした」

それだけ言つと、彼はまた笑いだす。

彼の綺麗な黒髪がさらさら揺れる。

「見た目に似合わずつて…失礼な」

ぼそつと呴いたあたしだって、ホントは。

彼が笑顔を見せてくれたことが、嬉しくて仕方なかつた。

「じゃあ…はい」

まだ呼吸が多少荒いが、アドレスと番号、それから名前が書かれた紙を彼はくれた。

「べじょつ…といま」

九条透真。

「Jのひらとの名前…」

「アハ。君は？」

「あたしですか？… セレーナ、みつひこになります。漢字は、Jリナです」

手のひらに指で字を書いてみせた。

“櫻 未羽”

「…みつへ・可愛い名前だね」

田線を合わせて九条さんはまたふわっと笑った。

駄目だあたし、Jの笑顔に弱い。

「…あ…りがとお」やれこれます…」

所々小さく、蚊の鳴くような声で言ったから、彼に聞こえたかどうかは分からない。

「じゃあ、あの…学校行かないといけないので」

「そつか、そうだね。いついらっしゃい

「…つ。いつでもます」

な、何ですかね、この夫婦みたいな会話。

ギクシャクとした笑顔で、あたしはその場を去了た。

「つ、はあああああああああ～」

だから、その後に九条さんが大きなため息をついたことなんて、あたしは知らない。

学校に着くと、案の定友達から追及をつけた。

「未羽う～？こんな時間まで、どこで何してたのかなあ～？今何時聞日か～存知ですか～？」

「うつ…この、情報収集屋め。

「一時間め…」

「吐一け」

につこりと語尾にハートがつく勢いで、どす黒い笑顔を見せるあたしの友人、黒瀬ひな。

「…黙秘！」

ひなに知られたらこれから先どうおちょくられるか、分かったもんじゃない。

あたしは精一杯の抵抗をしてみせた。

「うふッ。いつから未羽そんなに偉くなつたの？未羽に拒否権なんてないぞっ」

可愛い顔してコイツは！

…まつたく末恐ろしい。

「別に、なんもないよ。途中で腹痛くなつただけ」

平静を裝つ。

「ほんと?..」

「ほんと」

「じゃあ聞くけどね~、ジオしてシャツが学校指定のじゃないのかなあ?..」

「……っー..」

それは氣づかなかつた。くわつ、直角。

「あ、どーして?..」

答えられないもんなら答えてみなさい。

…田が、語つていた。

く…、あたしの抵抗もここまでか!..?

なんて、諦めかけた時。

「はーー。H始めるよ~

入って来たのは担任の小川原聖子。通称聖子ちゃん。

「ちっ…。聖子ちゃんなんてバッドタイミング。これじゃヤだわ」

あー聖子ちゃんなんてグッドタイミング！あなたこそ神だわ！！

…同じ時あたしはそんなことを思つたりしていた。

「しようがないなあ。今はとくあえずやめとくけど。次の休み時間、覚悟してねッ」

形の良い、小さな唇を怪しげな三日月形に変えて、スカートのプリーツを鮮やかに翻しながら、ひなは自分の席に戻つていった。

…あたしはとこつと、ビリと疲れが押し寄せて思わずため息。

頬杖なんかついて、聖子ちゃんの連絡事項を話し半分に聞いていた。

机のうえに、腕で顔を隠すように突つ伏す。

学生ならみんな寝るときいつもよなあ、とかビリでもこっこ考えたりして、あたしは口を開じた。

ときおりふいて、ふわっとこく香りがする。

「…？」

何コレ？こつものあたしの香りじゃない。

ああ 。。

このシャツの。 九条さんの、 香りだ。

そう思つたら、一氣にむず痒いよつた、ふわふわと体が浮くよつた。  
不思議な気持ちになつた。

シャツ、返したくないな…。

そう思う自分はちょっと変態くさいな、と思つたけど本心なのだから仕方がない。

あたしはもう一度だけ深く息を吸つて、意識を手放した。

次に田を開けるき<sup>二</sup>かけにな<sup>一</sup>たのは、ひなの声。

うひな

なあに、その寝ぼけ眼ねえ、緑鳥そのシャン説のなのよ！」

ひながあたしの腕を握って体をねじねじと揺らす。

やめてくれ 寝起きで頭が痛し

「なんでもないってば」

「もう、バレバレなんだから教えなさいよ。」拒否権ないつて、言つたよねっ」

可愛らしく言つてはいるけど、ひな、目が笑つていない。

あたしは背筋に寒いものを感じ、観念して話すことにする。

あーあ…これから先、このネタでじられるんだろーなあ。

「今日学校来るとなむつに打ち水かけられたのよ、車屋さんの若い男のひと」

「若い男のひとか…未羽、いいなあ。カツコよかつた?」

「つて、食い付くのそこかい。

あたしは心中で突っ込みながらも、ひなの問いに九条さんの顔を思い浮かべる。

「カツコ…こつてこつよつ、綺麗、だつたな」

口に出してみると改めて実家せりわけ、血ひもウンウン、と頷きながら会話をする。

「綺麗なの?…うーん、よく分かんない。どんな顔」

「どんなつて…」

あたしはどうにか伝わらないかと、両手が意味不明な動きをする。

「なあにそれー意味分かんないよつ

「うーん、髪は黒くてさうつわうで…」

「うんうん

「鼻筋通つてて…」

「それで？」

「肌がきめ細かい」

「…………」

「あと、田がおつかいかな

「…男？」

「男」

自信を持つてわざわざと書い。

「…ねえ、きよおの帰り連れてってよ」

「ええ？ 車屋さん？」

何を言つかな」の子は…

「見たいもおーんつ。ね、約束ー」

ひなはあたしの手を取つて上下にウンウン振ると、満足そうに笑つて自分の席に戻つていった。

今まで約束したことになつてこぬらじご。

呆然としながらもあたしは、もしかしたらまた九条さんに会えるかも、なんて不謹慎なことを考えて知らずに胸を高鳴らせていた。

放課後、もう一回化粧直ししなきや、なんて考えながら。

九条さん、現金な女で「めんなさい！」

いち。出会いは水も滴るイイ女？（後書き）

～時計塔の下での連載を終了してから、ずいぶんと時間が経つてしましました(汗)。今度は、何の裏も伏線もない素直な恋愛を書きたいと思い、始めました。それほど長くならない予定です(・・・)  
ぜひ一読を更新は週一、土曜日の予定でどうぞ。」意見  
ご感想、待っています(・・・)

## 11. 田々を彩る五時の約束

軽くメイクを直してから一人で学校を出て、あたし達はしつかり車屋さんに来ていた。

「どれ? どのひと?」

ひなが148センチの低身長をカバーするように、精一杯首を伸ばして事務所の中を覗く。

あたしは163センチとわりと大きいので、普通に立っていて中の状態は伺えていた。

「」の車屋さんは、外からでも事務所の中が見える造りなのだ。

「うーん… いないみたい」

「ええー、つまんないの。せつかく美男子を揃めるかと思つたのに」

ひなが唇を尖らす。

「はは… 仕方ないよ。今日は帰ろ?」

あたしは九条さんがいないとほっとしながらも、心のどこかで少し残念な気持ちがあつた。

不思議だよなあ。…今朝会つたばかりのひとなのに。

ふう、とため息を吐いて踵を返したその瞬間。

「 もやあー。」

「 うわ、びっくりした。… 未羽ちゃん」

すぐ後ろに、思い描いていた彼がいた。

「 くくく九条さん… なんでそんなところにいるんですか？」

「 ははっ、ぐが多いよ。外回り行つて今帰つてきた所なんだ。見覚えある後ろ姿が不審に会社の中覗いてるなあと思つたら、やつぱり未羽ちゃんだつたんだね」

「 う、その… はい」

不、不審だつて… めちゃくちゃ恥ずかしい。

「 見覚えある」 って言つてくれたことは、すくなく嬉しいけど。

「 今朝はほんとうに」 めんね。学校、大丈夫だつた?」

「 あ、はい！ それは全然問題なしです」

「 あー、良かった。僕今日仕事しても、未羽ちゃんは大丈夫かなつてことしか頭に浮かんでこなくて。安心したよ」

「 九条さん…」

「 それでどうしたの？」

はつ！そつだつた！あたし理由考へてない！！

何で言えぱいーの？

ミーハー心に負けて顔を見に来ました、つてー？

あたしがうまく立ち回れず赤くなつたり青くなつたりしていぬと、おとなしくずっと横でいきさつを見守つていたひなが、元気に声を上げた。

「はいはーいつ。突然来てごめんなさい。あなたが九条さんなんですね。あたし、未羽の大ツツッ親友の黒瀬ひなつて言います」

「へえー、そなんだ」

「え…、ひな？てゆうか、九条さんもそんなんあつたり信用しないでよ！？」

「はいっ。それでねえ、未羽から今朝のこと聞いたものだから、あたしも親友としてシャツ貸してくれたお礼言いたいって言って、無理矢理ここに案内してもらつたんですつ」

得意満面。

ひなは堂々とそつ言い切つた。

「なるほどね。でも今朝はほんとに僕が悪かつたから。お礼なんてよかつたのに、未羽ちゃんいい友達持つたね」

「ははせ」

あたしは乾いた笑いしか返せなかつた。

ひな、恐るべし！

「じゃあ、今日のところは帰ります。九条さん、ばいばい」

え、ええ？ 帰んの？

あたしも慌てて頭を下げる、「わよーなうつ」と言つて車屋さんを後にした。

びっくりして小声で「うん、さよなら…」と返す九条さんが田の端に映つて、あたしは何度も何度も「めんなさい」と心の中で謝つていた。

そして、夜。九条さん宛のメールの編集画面を表示したまま、指が動かず數十分。

どうしよう…なんてメールしよう。

とりあえず連絡先ゲットしたのはいいけど、メールをしたら繋がりが切れてしまう気がして怖かった。

だって、『明日シャツ持つていきます』『分かった』ってなつちやつたら、それでもう用事は済んじゃうじゃない？

あたしはそんなの嫌だつたから…。

でも、シャツを返すためだといつて聞きました以上、その内容でなければならぬ。

ため息をついて、あたしはメールを打ち始めた。

未羽です。

今日はいきなりすいませんでした。明日、学校終わったらシャツ返しに行きます

五分後、意外にも早く、メールの返事がきた。

携帯を握りしめてベッドにうつ伏せで寝ていたあたしは、思わずびくっと過剰反応してしまふ。

：九条さんだよね。メール開けるの、意味もなく緊張するんですけど…！

分かった。未羽ちゃんは、何時頃くるの？

うわああああ。

九条さんの、初メール！！保護しなきや。

あたしは、ばかみたいにテンションが上がってしまうのを自覚した。

やつぱりあたしつて現金な女。

仕事は何時に終わるんですか？

学生で部活にも入つていないあたしの方が早く時間が空くのは日に

見えていたから、九条さんの仕事が終わる時間に車屋さんを訪ねようと思ったのだ。

案の定、あがるのは五時過ぎだと返ってきて、あたしはその時間に会わせていくと伝えて、そのままメールを終わらせた。

だって、しつこい女だと思われたくなかった。

用もないのにメールを送る、つざい奴だと思われたくなかったから  
…。

九条さんとの出会い、初メール。

嬉しいような、悲しいような、微妙な気分で。

今日はやけに濃い一日だったと思いながら、あたしはここのまにか  
眠りについていた。

朝。チチチ…といつ鳥の鳴き声で目が覚める。

ああ、なんて清々しい朝の目覚め！

カーテンと窓を開けて、目一杯空気を吸い込む。

気持ちいい。

ぐつ、と伸びをして、ふと枕元の時計に目をやつたあたしは。

…どうかこれが、夢であつてほしこと思つた。

八時…? やばいって一間に合わないから…。

学校まで徒歩一十分で通つていたあたしは、めりもへりも焦つていた。

「飯も何もかも、後回し。

だからもうひん、ベッドサイドに用意していた洗濯済みの九条さんのワイヤーシャツのことだって、頭からすっぽり抜け落ちていたのだ。

学校に着く、その時までは。

「未羽。ごおしたの、ずいぶん疲れちゃつてー

…そりや、あんた。家からぶつ通しで走つてりやあね? 誰でも疲れつづーの。

「瀕死。」わ

「……

「髪の毛もぐぢゅぐぢゅだねつ」

そつだよ。じんなんじゅ、九条さんこだつて呑えない…………。

九条さん…九条さん?

「あーーツツー！」

「ワイシャツー！ワイシャツ忘れてた！！

最悪…ありえない！今日行くつて言つちやつたのに…

しかも、昨日携帯を握りしめて寝てしまつたから充電もされていなかつた携帯は、いまやただのインテリアと成り果てていた。

メールで教えようにも教えられない。第一、仕事中なら見てもられるかどうかさえ分かんないだし！

ああーもつ、あたしの馬鹿…どの面さげて九条さんに会いにいけつてゆーのよ！？

「未羽。心の中で会話しないでー。傍から見てれば変人だよおー」  
ねつ、分かるう？と、ひなはあたしの頬をペチペチ叩いた。

「痛い。分かる」

「あれ？自分変人つて認めちゃつた？うふふー」

……。

「鐘。鳴るよ」

「ちえー、つまんない。未羽、今日も九条さんとこ行くんでしそつ  
？進展あつたら教えてねん」

だから、ビビからそんな情報を！ほんとに怖い子！

あんたがひせあたしが逐一報告しなくて、その情報網使って状況把握しちゃうんでしょー？

自分がからむせつけたい、教えねえー！

なんて決意を固めたとき、ふと思つた。

…五時まで何してよ！

結局。

時間になるまで、あたしはひなに付き合いつもりだった。

ふつ。…決まらない。

九条さんが勤めている車屋さん。そこから出たところすぐで、腰掛けられるよつな段差がある。

ひなと別れて学校から歩いて来て、疲れていたもんだからラッシュキー、なんて思つて座つた。

よし、ここをあたしの定位位置にしよう。

……って、これからも来る気満々じゃん、あたし。

とりあえず明日はシャツ返すために来るのは確定なんだけどね？

九条さんだってそれ以外の用事なんかないの、分かつてるんだけどね！

……ふと、冷静になつた。

どーセ、変人ですか。男のひとのワイヤーシャツの匂いかい、鼻の下のばしちゃつてる変態ですから？

……虚し。

なんてことを、つらつらと考えていた。

「末羽ちゃん？末一羽ちゃん」

そして、これも変態が為せるリアルな妄想の一端なのだろうか。

目の前に九条さんがいる（ようになにあたしには見えた）。

なめらかそうに見える白い肌の手を、ひらひらとあたしの顔の前で振っている。

「…………」

つてー！本人だからー！本物だからあー？

「はは、はいっ、はいっ！」

「はい、は一回」

「は二一。」

「ふう……、くくう」

「……」

九条さんが吹き出しだ。

笑っちゃいけない。我慢しなければ。でもやつだめだ、おかしくさ。

…みたいな笑いで。

「なんで」やこましょーか」

わすがのあたしゅわうとむうとじて、半眼でじとじと睨めつかる。

九条さんは、「めん」「めん」と謝った。だけどすぐに、でも、と言葉を続ける。

「可愛いんだもん」

「えつ……？」

「犬みたいで」

…うん。分かつてた、お約束。

「悪く受け取らないでね？ 許め言葉だから」

「ええー。」

ぐ、九条さんてやっぱり天然だ。

紛つことなき天然だ！

そんなんでいまどきの女子が喜ぶとでも思つてんだろつか？

「未羽ちゃんの笑顔、可愛いんだから」

…うん。

喜ぶ。

素直に喜んでじゃつよ。

「…で、なんか見たところシャツ持つてきてないみたいだけど…」

「あー！」

そう、これが本来の用事。

「それなんですけどー今朝、寝坊して忘れてしまって…ごめんなさい。携帯も充電切れちゃつし…」

「ああ、それでわざわざ伝えてきたんだねえ。ありがと、僕は明日でも全然構わないと」

でた！必殺九条キラースマイル！！

「う…後光射してゐる。

「ありがとうござります」

「ん、いーよ。それに、また忘れても今度はメールで知らせてくれればそれでいいし」

ね？と言つて、九条さんはまた笑う。

「え…」

一瞬、フリーズしたあたしを訝しげに覗き込む。

「…どうかした」

「い、いえ、あの…」

それじゃ、会えなくなっちゃう。

顔、見れなくなっちゃう。

あたしは、スカートのポケットの中の携帯を、布地の上からぎりぎりしめた。

分かつてる。

あたしにそんなこと言つ権利なんか微塵もないの、分かつてる。

でも、だから 。

「く…九条さん」

「ん？」

「あ、あたし…携帯、今日から使えないんです。今月、ちょっと苦しくて。料金未払い止められちゃいました」

嘘。

神様、ごめんなさい。

あたし嘘をつきました。

「やうなんだ…」

「だから、忘れても持つてきても、毎日来ますね。…九条さんが待ちぼうけしないようこつ」

嘘を、胸中を悟られたくなくて、あたしは努めて明るく言う。

九条さんは、それを何の疑いもなく信じたようだった。

「そつか、分かつた。じゃあ僕も待つてる」

そんな流れで、あたし達の午後五時の待ち合わせが始まった。

日付が変わっては、何も持たずに九条さんの会社に訪れる日々。

毎日毎日、決まったあの場所で、日が沈むのを眺めながら「未羽ちやん」とわたしを呼ぶ、やさしい声を待つ。

もちろん、こんな毎日本氣でシャツを忘れているわけじゃなかつた。最初の一 日以外は、全部わざとだつたのだ。

平穏で、何の変哲もない、安息感に包まれたゆるやかな幸福を噛み締める。

あたしは確かに、九条さんと一緒にいる時間が大好きだつた。たまらなく好きだつた。

今日、学校で何があつたとか、嫌いな先生の愚痴とか、テレビの話とか。

他愛のない話を、彼は嫌な顔一つせず聞いてくれた。一緒になつて、ノつてさえくれた。

時には九条さんが、あたしにこれまで同じように嫌味つたらしい上司の愚痴を言つていたこともあつた。

二度、晩ご飯にも連れてついてくれた。

そうやって、三週間。

ある日、あたしはひなの様子がおかしい」とこぼついた。

前はあれほど進展はあつたのかつてつむをかつたのに、じりじりぱりくあの小悪魔的な笑顔を見ていない。

それに休み時間の度、必ず誰かとずっとメールをしていた。

：なんでだろう。

胸に、一陣の風が吹いた。

## セミ・アルモードベントルの説二（福井城）

一週遅れで申し訳ござることせんぞ（――）三時にがけないハピーン  
グがちゅうじゆつめし…（汗）ドゼン語田、アリヘル><

## セミ・ハルカセイベントヒュウガ

残暑がまだまだ残る九月。あたしと九条さんが出合つてから、約一ヶ月が経つていた。

いつも座つて待つて居る「コンクリート」今田も相変わらず腰掛けて、あたしはその九条さんを待つ。

段々暗くなつてゆく辺りを見回しながら、首をかしげた。

……なんだろ。今日は遅いなあ。いつもは夕陽になるかならないかって感じの時間帯に来るのに、今日はもう半分以上沈みかけてる。

仕事が忙しいのかな？

……なによ、わづ。皿してさしこいて言つかけつて。

脳裏に浮かんだのはひなの顔。

今日の皿の」とじだった。

弁当を食べ終わつてふと向かい側に座つていたひなを見たら、せわしくカチカチと携帯を打つてるものだから、またメールしてるのかと思つて軽い気持ちで声をかけたのだ。

そしたらあの女。何で言つたと思つー。~

「今忙しいから話しかけないで」

だよー? ひどくない! ?

そこまで忙しいメールって何なのよー!

この間から一体誰とメールしてるの! ?

疑問符が次から次へと浮かんでは消えた。

そもそもあたしは、何でこんなにひなのメール相手が気に掛かっているんだろう。

不思議と自分でも分からなかつた。

ただ とにかく心がざわつくのだ。

あたしの知らないところで何かが起こっている気がして 。

「未羽ちゃん」

待ち焦がれていた声に呼ばれてはつと気がつけば、そこにはもう車のキーを持つて淡く笑う九条さんがいた。

「すいません。また気づかなくて……」

また、つていうのはあたしが今みたいなパターンをよくやるから。

考えこんでて気づかない。

あたしの悪い癖。

「今日もワイヤーシャツは…………持つてきていみたいだね」

九条さんが、分かつてたけど……と笑った。

「うあ……すみません」

恥ずかしそうに顔を染めてうつむく。

ワイヤーシャツは、わざと汚れる口がほとんどだったけど、たまーに本気で汚れる日もあるのだ。

今日は本気で忘れてた。

そして、思ひ。……そうそうあいつによね、この設定も。

一ヶ月携帯未払で止まつてゐるけど、だけ? って話だし、ワイヤーシャツだって普通に考えてさあ……。

あーあ……そろそろ潮時、かなあ。

「行ひつか」

「あ、はい」

またぼーっとしてたあたしは、九条さんに促されてコンクリートから腰を浮かしたのだけれど。

つて、え?

「行こうかって言ったよね？今！？」

「あああああの！？い、行こつかつて」

赤くなつてあたふたするあたしを見て九条さんはまた笑う。つてい  
うより、吹き出した。

「ふつ、未羽ちゃん慌てすわ。ついておこで。今日は送るよー」

そう言つて歩き始めた彼の後ろ姿を、あたしは数秒見送つて。

今田正送の年譜

今日は送るよー！？！？

つてその、やっぱリアレだよね！？

くくくく九条さんの車に乗っちゃうっていつ

なにこのどかぬ也イベン~~~~~ジッ-----

声にならない叫びを胸の内に秘め、脳内あたしがじたばたする。

急いで九条さんに追いつくと、運転席に回る彼とは反対側に、助手席に回った。

「の…乗っちゃつていいんですか」

ג' ע' נ' א' ע' ג'

その言葉を受けて恐る恐る扉を開ける。

ふわっと、あの時シャツから香ったのと同じ香りがした。

「ひっまあ…。

はつ、また変態癖が！いけないいけない。

ぶるぶるっと頭を振って、シートに座る。それを見届けて九条さんも車に乗り込んだ。

バタン、と扉が閉まる。

「 つ、「

あ、ヤバイ！これはヤバイ！！

軽の運転席と助手席つて、実はめっちゃめちゃ距離近い！

想像以上の刺激に心臓がぐくぐくこわおわらない。

ああもう…顔があつい。

「未羽ちゃん、出て右だよね」

そんなあたしなんか露知らず。

九条さんは平然とあたりまえの質問をしてくれた。

あ、そつか。家の場所説明しなきゃいけないのか。

「そ、そりです。で、次の信号で右に曲がって」

「え？ どうひ～」 ひのちの信号？」

指差すほつを見るといこから同じくらいの距離のところでふたつ、信号が鎮座している様子が入ってきた。

ああ、あそこ間違える人が多いんだよな。

まだ駐車場から出でていない車内で、説明すべくあたしは無意識の中に車のシートに膝立ちし、身を乗り出していた。

すぐ右隣には、九条さんがいたことも忘れて。

「う、あ？ めやッ」

狭い車内で膝立ちなんて、やつぱり無理があった。

一瞬でバランスを崩したあたしは、そのまま思い切り運転席に座る九条さんの足のうえに倒れこんだのだ。

「…ひ、」

一瞬、ときが止まる。

あああああたしのばかー！

ハンドルにちょっと頭をぶつけたんだろう、鈍い痛みで脳が覚醒する。

と同時に、一気に顔が赤く染まった。

ふつふつと湧いてくるのは羞恥心と。

「未羽ちゃん」

ほんの少しの、期待。

…九条さんの大きな手が、よつんぱいになつたまんまのあたしを助け起こす。

「うわ、じめんなさい九条さん…すぐだけますからっ、あの、その…」

そこまで言つてから、あたしは一の句がつげなくなつてしまつた。

…ひどく真面目な、九条さんの端正な顔。

間近で視線を合わせたまま身じろぎもせず、ただお互いの息遣いだけが頭を支配する静寂。

触れられている腕が、あまくつよく痺れている気がして。

「ぐ、じょりや…」

のどちらかされた声が出た　　その時、だつた。九条さんの意外に大きい携帯の着信音が、メールを受信したことを知らせたのだ。

あたしはあからさまにびくん、と反応して、思い出したように九条

さんの上からじき、元の助手席のシートに納まつた。

それを見届けてから、ふつゝとため息をついた後、九条さんはポケットから携帯を取り出す。

「え？ 今の、何のため息？」

あたし？ あたしに對して？

「呆れた？」

それが分からなくて、でも理由なんか聞けなくて。

携帯を見る九条さんの横顔を、ただそつと盗み見ることしかできな  
い。

「…？」

あれ、なんか… 表情が険しい。

いつでもふわっと綺麗に笑う彼だから、あたしはますます不安にな  
つてしまつ。

「…どうかしたんですか」

「うん？ …ううん、何でも。大丈夫だよ」

ポンポン、と頭を叩かれた。

…なんとなく、これ以上は聞いてほしくないって言われているよう

で。

あたしはおとなしく口をつぐむしかないのだった。

「や、行こうか」

声とともに車にエンジンがかかって、とうとう車はあたしの家へ向かって走り始める。

うわあ……なんか……何て言つか…。

恥ずかしいっ！

今まで何度も晩ご飯に連れていくつもりたこともある。

でも、その時は例外なく会社から歩いて移動していたから、実は車に乗るのは初めてなのだ。

何を話していいか、そもそも運転中の彼にペラペラと話しかけても良いものか。

普段、運転手を務めている父相手であったなら全くしない気づかいをして、黙り込む。

ああでも 話したい。声が聞きたい。

…末羽ちゃん、つて…呼んでほしい。

なんだか無性に泣きたくなつて、からだのみぞおち辺りがきゅつと絞まつた気がした。

「……？」

何とも言えない気分のまま顔を上げて外を見やると、そこはもうすぐ家の、ひとつ手前の信号だった。

ぐ、車速い！

元々、家から学校までは徒歩で通える距離だ。

その中間地点の九条さんの会社から車で帰るとなれば、四、五分で着くのもあたりまえだらう。

せっかく神様から『えられたチャンスを、全て無駄にしたような気持ちで。

無意識に口からはあ……といぼれたため息は、車の発信音にまぎれて消えた。

…隣の九条さんはといえば。

駐車場を出てから、ずっと何かを考え込んでいたようだった。

ついで、駐車場を出てからじゃない。

あのメールを、見てからだ。

。

眉間に皺寄せた九条さんもやっぱり麗しいけれど、それとは反対にざわつく心。

それを打ち消すために、あたしは大きな声をあげた。

「『』でいいです…ッ」

「え？」

おとなしかつたあたしがいきなり声をあげたからか。

九条さんは驚いた顔をしてあたしの方を振り返った。

「『』から本当にすぐなんです。あたしの家。これ以上入っていくとちよつと道狭くなっちゃうから…」

これは事実だった。

「大丈夫だよ？運転ならかなり慣れてるし…」

そう言つてくれる九条さん。

嬉しいんです。嬉しいけれど。

「お願いです…『』で」

あたしは、あなたの隣にいると…嬉しい以上に、辛いんです。

あなたのそそのがめられた眼差しは。

一体、誰に向けられているんですか？

…ふつうじゃないあたしの様子を感じ取ったのか、訝しみながらも、いぶか

九条さんは黙つて路肩に車を停めたのだった。

のうのうと降りる準備を始めるあたしかり、九条さんは田を離れた。い。

顔が綺麗な分、九条さんのまつすぐな眼差しは、どうか鋭く感じさせられる。

意識しながらも気づかないフリをして。

「じゃあ… ありがと」「わざこました」

ドアに手をかけた、その瞬間。

「未羽立ちやん！」

え……。

ぬくもりを感じたのは、右の手。

いきなりの展開に、今度はあたしが驚いた顔をして右の手に田をやると。

あたしのそれは、九条さんの左手に包まれていた。

「ひー」

その光景を認めた途端、瞬時に頬が赤く染まる。

自分でも容易に分かるほどの。

おひまつていたはずの心臓が嘘のよつよ、またびくびくと脈を打ち出した。

なにー…ビリしてー?なんであたしの手があなたの綺麗な手の中にー。真っ赤な顔に、恥ずかしさと、何があるんじゃないかつてわいせきじゆ猜疑心から生理的に浮かんだ涙。

その時あたしはよほど情けない顔をしていたと思つ。

繋がれた手を凝視していた目線を、そのままおずおずとあげれば。

真剣な瞳とかち合つた。

「あ…」

「未羽ぢやん。」

「は、はー」

「明日は、暇?」

「……はー?」

…予想していなかつた言葉に、見事に声が裏返る。

「時間、ある?」

なおも問う九条さんの瞳は、真剣そのもの。

通った鼻筋。キリッとした眉。長い睫毛。

何より、その、漆黒の瞳。

気づいたときには、吸い込まれそうに「はい…」と答えていた。

けれどあたしをもつと驚愕させたのは、その次の言葉だつた。

「海に、行かない？」

「…ふえ？」

「海に、行いつよ~」

「えつ…、ええ――――」

海！？海つてあの海！？海原の海！？The sea！？

なんで…ビーして？っていつか…凄く嬉しい…！

「行くつ！行きます！行かせてください」

反射的に一つ返事でオーケーした。

海、大好きーッ。

瞳を輝かせて「へへへ」とつなづくあたし。

すると次の瞬間、九条さんは 。。

「セリ… 良かつた

」

…笑つたのだ。

いつもの綺麗な微笑じやない、心の底からほつとしたような、相好を崩した笑顔で　。

「

」

ねえ…なんで？

なんでそんなに…ほつとしたように笑うんですか？

あたしが、あなたからの誘いを断るとでも思いましたか…？

断れるわけ、ない。

断れるわけ、ないよ…。

まだ笑つてあたしを見ている彼の顔を、どこかぼんやりと見つめながら。

あたしはそんなことを考えていた　。

よん。行ひやひやこまゆ、海に

土曜日の朝。待ち合わせ三時間前に起きたあたしは少しでも見目を良くしようと奮闘した。

三時間後、できあがったあたしは結局いつも通りだった。

もーいいや、これで。

だつてこれが無理してないあたしだもん、だなんて開き直りもいいところだけど、事実なのだから仕方がない。

白いワンピースにサンダルといついかにもな出で立ちで外に出てみると、ここから100メートルは先の、昨日降りしてもらった場所にもう九条さんが待っていた。

ふんぎやあーまた心臓がうるさくなつてます大佐！！

誰に言つてんだかとにかくあたしは緊張度最高潮。

車に近づいてやくにつれ、はつきりと九条さんの表情が読み取れるようになる。

キラースマイルだった。

あたしはしつかりやられた。

ああもう…先行き不安。

今日一日、あたしこの人の魅力に耐えられるんでしょ？

「未羽ちゃん、今日ありがと！ これなりだつたのに」

車が走りだしてすぐ、九条さんがそんなことを申し訳なげに言つた。

「な、なに言つてるんですか！？ あたしが九条さんの誘い断るわけなつ……」

そのままで言つて、あつと口をおされた。

こんな恥ずかしい本音を叫ぶやつが一体どいついるのよ、馬鹿ー！  
羞恥に顔を染めて、うつむく。

驚いて瞬いていた九条さんの表情が、頭から離れない。

あると。

「未羽ちゃん。みーつちゃん」

横からぽんぽん、と頭をとても優しく叩かれた。

どきん、と胸が鳴つて顔をあげると、一再またすんぐ優しく微笑んでいる九条さんがいた。

「ありがと。嬉しいよ？」

「 、 」

ああ、もうーもうーもうーいちいち反則なんですねあなた!!!

あたしを殺す気なんですか!?

キュン死にといふ名の殺人です。

死なないように頑張つたあたしを盛大に讃めたいよ…。

九条さんは見えないように顔を背けて、そっとため息をついたのだった。

そろそろ、走り始めて二十分。窓から見える風景からは段々と建物が消え、自然が多くなってきていた。

「あれ。そういえば、海ってどこの海行くんですか」

あたしはじきながらの疑問を感じて、ぶつけてみる。

「言つてなかつたつけ。つて言つても名前なんて知らないんだけどね、三十分からない」「近場の海だよー?」

ショボくてごめんね、と言つて九条さんは視線をあたしからフロントガラスに戻した。

ショボいだなんてそんなーあなたと出かけられるなら例え農場だってパラダイスです!!

と、心のなかでは猛反論したのだけれど、あいにく口に出せるほどあたしは素直でもないし、あけっぴろげでもない。そんなことないです、嬉しいです。ただけ言つておく」とこした。

九条さんは、そう、良かつたと言つて笑つた。

車がまた静かになつて、あたしの視線は自然に九条さんへ移る。

また脈が早まつた。

もう、身体の反応だけは素直なんだから。

…運転してゐる姿も格好いい。さまになつてゐる。

そんなことを真面目に想ひつい。

窓の外に右肘かけて頭乗せて左手一本でハンドル操作してゐる姿だとか、そのおかげでよく見える首筋だとか、力入れるたびに筋の浮く意外に筋肉質な腕だとか。

それらのひとつひとつに視線が吸い寄せられて、あたしは夢中で見入つていた。

沈黙も、なんだか心地よくて。

あたしは、時が止まつてゐるよつた感覚に酔いしれていた。

「そんなに見られると恥ずかしいんだけど」

「えつ」

ひぐり、と息を呑んだ。

やましこじなんて何もしてないのに、やましこじと見つけたのが見つかった気分！

いや、これってむしろ『やましこじ』！？

「あ、『眞づこ』たんですね？」

「やつやあね。こんな狭い車の中でもじっと睨つめられいや、わすがにーせでも眞づくよ」

「お、教えてくださいよ」

「『』なん。なんかトコツブしてゐみたいだつたから」

「ハハ…。トコツブしたのかあたしさ…。

『ほやー』とした顔も可愛かったよ~」

「ふうー…か、かわ…」

可愛いつて、言つた、今？

幻聴…？

「うそ、可愛い」

“ああ――――――幻聴じゃない――――――

真っ赤になつてあたふたする。

『えいえいお』「よしー、嬉しいー！しかも、わたくし、ほやーとしてる顔  
『も』可愛いって言つてたよねえー！？」

あたし、聞き逃さなかつたよーー？

『も』うほんとさせ、その他も…。

ドキドキ鳴つてる心臓を意識しながら九条さんを見た。

つて、もうふつーに運転に戻つてゐるー。

がくつとつなだれる。

……「ほん？待てよ？」

『ほやーとしてる顔も可愛かつたよ』つて、あたしの顔も見てな  
きゃ分からなによね？それつて、つまり…。

「み、見てたんですかーー？」

「え？」

「あたしの『ほやーとしてる顔』。ほやーとしinる間、ずっと  
見てたんですかーー？」

責めるように言い寄つた。ほやーとしinるつて、つまり、ぼーつ  
としてアホ面だったつてことでしょう？すうとそれ、見られてたな

「……うん？ わあ、あはは。どうだろ？」

「どうか違つてますよつこ」と祈りを込めて九条さんの答えを待つた。

彼は数秒、黙り込んだ末

。

なんて、なんとも曖昧な答えをくれたのだった。

「海だーっ」

あれからすぐ、あたし達は目的の海に着いた。

結局例の答えは教えてもらえず、今に至つている。

もつ氣にしないからいいもん！

そんなことより、目の前には青い青い海！

快晴とまではいかないけど、真っ白な雲と、その山間から顔をのぞかせる空。

それに、砂。

あたしはサンダルを脱いで、足元に広がる砂を裸足でぎゅっと踏んだ。

それから、指で握ったり開いたりしてみる。

「この感触、だーいすきー。」

「えつへへへへ～」

しかも隣にいるのが九条さんときた。

これが、にやけられないでいるものかっ！

「未羽ちやん… わうとウソトシヨンあがつてゐね」

「セーですかっ？」

「だつてずつと笑つてゐる海、来て良かつた？」

「うんっ、嬉しーー！」

喜色満面の笑みで言った。

その後で、はつと氣づく。

あたし、嬉しさのあまり今ふつーにタメ口使つたやつた…。

隣に立つてさつときまであたしと同じように風景を眺めている九条さんの横顔を、盗み見た。

…全然気にしてないビリカ、九条さん！セがとても嬉しそうに笑つていてる。

「…………？」

「 良かつたよ」

そう、前を向いたまま彼は唐突に呟いた。

「 な、にがですか……？」

聞き返すと、横にいるあたしを振り返つて、九条さんは微笑んだ。いつものかいきら輝くキラースマイルじゃなくて…ただただ、やさしく、やわらかく微笑んだ笑顔。

「 未羽ちゃんが、嬉しそうで」

「え？」

あたし ?

「 未羽ちゃんが笑つてると、僕も嬉しい」

だから、来て良かつた。

九条さんは、穏やかな声音でさつ続けたのだ。

あたしはなんだか、また胸がぎゅうっと絞めつけられる感覚がした。そして、その後、泣きたくなつた。

理由なんか分からぬ。

ただ、ビーフシヨウもなく、切なくなつたのだ。

「今日はさきつと楽しくなるね」

九条さんが言ひ。少しほにかんだ笑顔で。

「う、はい！」

あたしは答える。精一杯の笑顔で。

…今日一日で、分かるかな。

九条さんといふと、こんなにも胸が絞めつけられる理由。

土曜の午前十一時。

いつもして、あたしの人生初のデートは幕を開けたのだった

。

よん。行つまぢあひこま、海こ(後書き)

「めんなさい」と（――）三ひたすら「めんなさい」と（――）三連三  
ていたより忙しくて更新日を隔週で田曜日こしまか 読んでください  
ある方申し訳ありません（――）

## 10. 魔法使い誕生？

「って言つても、毎食べてないから少しお腹空かない？」

九月にも入り、あまり人気のない海を散策しながら九条さんがあつた。

昼ご飯、その単語にあたしはびくつと過剰反応をした。

なぜなり。

「あの…あたし、軽く食べられるもの作つてきたんです。食べますか？」

そう、サンドイッチを作つてきていたのだ。失敗のない、安全パイの「じゅくぶつ」のサンドイッチ。

そのまま流れに任せて、ずっと鞄の中に隠していたサンドイッチ用の穴が空いてる弁当箱を取り出して、突き付けた。

むじり流れに任せなきゃ渡せないでしょ、これ？

「…………」

続くのは沈黙ばかりで、やばいおしつけがましかつたか？と不安になる。

はうはうして半分涙目になつた時、やつと九条さんが動いた。

背を少し曲げて、あたしの耳に口元を寄せる。

え、何。

熱い吐息を首筋で感じた。

「ありがとう、すっごく嬉しい

ひやあ！？

そのまま、なめらかな白い手が、弁当箱を持ったあたしの手、こと優しく包み込んだ。

はつとして思わず取り落とす  
瞬間に、九条さんがキヤッヂ。

「ちょっと、未羽ちゃん。手離しちゃ駄目でしょう、いくらなんでも

すすすすいません！でもその、ひくらして…

「そりゃ、首弱いんだね」

一  
な  
う  
…  
「！

そういうことを言ひてるんではなくね！？

「どうか座って食べようか、といふ座る？」

話聞いてないし！こつ、この人…意外に、てゆうか絶対、Sなのか  
もしれないっ！

「あ？普通に『つま』」

九条さんが少なからず驚いたようにいつ感想を述べた。

手にはレタスとハム、それにチーズをはさんだサンドイッチを持っている。これがわたしの一番のおすすめメニュー。

その後、砂浜から道路へ続く階段の一一番下に腰を降ろしたあたしたちは、海を正面に食事をとっていた。

「なんですか、その意外そうな声。ちょっと失礼ですっ」

「いや、ねえ？だって未羽ちゃんってあんまり『ひっこり』とできるやうに見えないから」

笑つてしまつとまた失礼。

「そんなむくれないでよ、あはは。『ごめんね？たださ、前も思つたけど未羽ちゃんって見た目に似合わぬまめなことするんだよね、結構』

「それ、初めて会つた朝も言つてましたよね？何なんですか一体い

あたしつてそんな見た田悪いだろ？

「悪い意味で言つてるんじゃないよ？未羽ちゃん、見た目はまさに

（）

今どきの子だからさ。もつと結構はじけてるのかな?って思つちや  
つてたんだよね」

確かに…あたしは見た目、明らかに清楚系じゃない。

どちらかっていうとギャル系だ。地顔が派手だから、着る服やメイ  
クもどうしてもそっち系になってしまつのだ。

あたし個人としては、清楚系だって好きだし着たい。でも実際問題、  
好きと似合はへつなのだ。

「ギャル系女子は嫌いですか」

ふてくされた感抜群で、俯きながら投げた問い。

「ううん。未羽ちゃんなら構わない」

それは、九条さんのあけすけな物言いに圧倒されて終わったのだった。

それ 言つちゃいますか、本人の前でつー

何事もなかつたかのようにまたサンドイッチを食べ始めた九条さん  
を横目に、あたしは、赤い顔を見られまいと懸命に下を向くことし  
かできなかつた。

あああたし…負けてる。

ご飯の後は、何がどうしてそうなつたんだか、あたし達は棒  
倒しをやつていた。その辺で拾つた適当な棒きれを砂浜に突き立て、

そこを中心に砂を盛る。

「九条さん、準備でわ」

言いながら顔を上げたあたしは最後まで言葉を紡げじができなかつた。

九条さんが驚くほどの真面目な表情で、ただひたすらにあたしをじりと見つめていたからだ。

思ひ出したように心臓が脈を打ちはじめる。

もしかして　　ずっと？

はしゃぎながら砂もりもつやつてんのずっと見られてた？

確かに手伝い少ないなあとは思つてたけど、やれつてあたしのことずっと見てたから！？

顔に全身の血液が集まつたみたいだ。

どのくらいじりじりしていたのだろつ、不意に九条さんが僕ちゃんと口を開いた。

続きを聞くひとつ耳をそばだてた。

でも結局、続きを聞けなかつた。

「あやー、あははー。」

「えり、そんなに走ると歯我するわよ」

近くを通った親子連れの声にかき涙されたからだった。

「『めん。なんでもない。やろつか、棒倒し』

にっこりと微笑まれれば、これ以上追及するのは憚はばかられる。

あたしも何事も無かつたように装つて、初めに自分側の砂を思い切り手前に引き寄せた。

量にして大体三分の一ひとつそこかな？

「次、九条さん」

「よーし。眞まうとくけど僕、棒倒し得意だよ？」

「えーで、でも、あたしだって得意ですから」

「やうなの？負けないけどねー」

「あ、たしだつて負けませうつ」

生来の負けん気がたつて咄嗟にそう答こたえるけど、あたし、とにかく可愛い！

「じゃ、そこまで言つなら賭けしようか」

ちょっとだけ自己嫌悪に陥つていたことなんて露知らず、九条さんはフリットにそんなことを言った。

「か、賭け？」

「負けた方が勝つの方の言ひ方と、何でもひとつ聞く。これでどう

賭けをもちかける九条さん、ほんと楽しそう。

キラキラして後光がさすかのようなあのキラースマイルじゃなくて、ただほんとに面白ことを発見した時のような、わくわくした笑顔であたしの返事を待っている。

ちょっと誰か、教えてよ。

こんな顔されて断れる人、いるつ！？

それにそれに。

あたしはよこしまな妄想をした。

あたしの言ひことを一つ返事で聞く九条さん。

いい。なんか、すこしく禁断の香りがして興奮する。

うわあ、思考、痴女。

「やるやしない？」

そこにまた九条さんの追随。

「やりますーやらずせて下せー」

あたしはあつさり煩惱に負けた。

その答えを受けて、九条さんが周り一周分の砂をかき寄せる。

それを確認して うん、まだいける。

両横に残っていた砂を一気にとった。棒の周りに小さい山があるだけになる。

「二つからだよね、棒倒しは？」

言つて九条さんは、また周り一周分結構思い切り砂を取つた。

え、いきなりそれだけ取っちゃうの！？大丈夫なわけ？ていうか次あたしで倒れんじゃないのコレ…！

心理的揺さぶり…？

ちら、と相手を伺ふと意地の悪い笑顔で二ゴニゴしている。

何が狙い！？

自分が混乱のどつぼにはまつていいくのが分かった。

「う…、と頭を抱えてそのあと意を決して砂に手を伸ばす。えーい！ザクッ。

「…………」

「……………」

「あ、れ？「うそ、なんで？なんでこれで倒れないの…？」

そこには、砂がなくなつても直立不動の木の棒が一本。

おかしくでしょビーフ着えてもお！」

「えー…と」

九条さんが恐る恐るとこつた感じで、もはや山ではなくつた砂を  
さらに深く掘り下げる。

パタン。

倒れた。

一瞬の沈黙のあと、九条さんと田代が会つ。

そして 、

「ふつ…」

「あはつ…」

どちらからともなく、笑い合つた。あははは、と開けた空間に笑い  
声がこだまする。

「おかしいおかしい！未羽ちゃん砂浜に刺す力強すぎだよ～」

「あたしのせいですかあ！？九条さん」そ何か仕掛けたんじゃないのーー？」

「しつつれーだなあ。してないってそんなことー」

万が一してたとしたら自分が勝てるように細工するつて。九条さんはそう言つてけらけらと笑つた。

こうこう風に笑つてる九条さんも、好きだなと思つた。

あとでわかつたんだけど。

あたしはどうやら、棒倒しのセッティング方法から間違つていたらしい。

ふつう、山を盛つてからその上に棒を立てるのに、あたしは地面の砂浜に直接立てていた。初めから、倒れるわけがなかつたのだ。

ともあれ、軍配はあたしに上がつた。セッティングを間違つていたとはいえ、棒を倒したのは九条さんだ。何でも言つことひとつ聞くという約束を果たしてもらわなければ。

「何を致しましょうか、お嬢様？」

キラースマイルでかしづかれる。

わあ、鼻血もん。

「えーとえーとその」

「ううううう、決められないーー」のシチューハーシュノコヒツサヘルハー

「か、帰るまでに勧えとかもすー」

苦し紛れに出した答えこ、

「わつですか。承知致しました」

九条さんはまたもキラースマイルでわつ聞ひだつた。

その時、沸騰するあたしの頭にふと微かに予兆もの泣き顔が聞こえ  
た気がした。

んん？ 気のせい？

訝しんで向かいの九条さんを見上げると、やつぱり涙のせじやは  
かつたよつて、回じく不思議そつな顔をして辺りを見回してくる。

「…聞こえたよね？」

「はい、聞こえます」

「いいから……、あ」

あ、と声を洩らして見やつた方向。あたしも田を向けると、泣きな  
がらふらふらといつちに向かって歩いて来る五歳くらいこの女の子の  
姿が見受けられた。

て、いうかあの子、

「わつわのナ...」

「え?」

「あの女子、わつきあたし達の横通り過ぎてつた親子連れの、子どもの方ですよ。ほら、九条さんが何か言おうとして、やめたときの」

そこまで言つてから、あとと口を抑えた。

…しまつた。これは、ふれてほしくなさそうな話題だったのに。

「…なんでそこでそんな顔するかな」

悔しそうに歯を嚙んだあたしの表情を読んで、九条さんが困ったようにな笑つた。

「だつて…」

九条さん、あの話にふれてほしくなさそうだったじやん。あからさまに、空氣変えだじやん。そういうしょ?

…あたしに、聞いてほしくなかつたんでしょ?

心のなかだけで問いかけた。

口に出せるほどあたしは九条さんと親しくない。

勇気もない。

「…………」

沈黙が訪れて、絶え間なく耳に届くのは女の子の声。あたしは無言のまま体の向きを変えると、砂を蹴つて女の子のそばにかけ寄った。

「どうしたの、お母さんは？」

「ふえ～ん、…あ、あ、～ん」

う、駄目だ。全く聞いてない。

助けを求めて無意識に後ろを振り返れば、九条さんもすぐそばに来てくれていた。

「無理そ？」

眉尻を下げて「ぐんとうなづく」と、九条さんが女の子の手の前にしゃがみこんだ。田の高さを同じにして、視線を合わせポンポン、とてもやさしく頭をたたく。

女の子は予想していなかった刺激に、ひくつと喉をならしかよとんとしていた。

「うわ、泣き止んだ！」

「お母さんどうした？」

田元をやせこむませて、九条さんが問い合わせる。

あ、あたしもそれやられたい……なんて思つた」と秘密にしていて、

「わしかしてえつかちゃん、はぐれちゃつた?」

自分も九条さんの隣にしゃがんで、聞いてみる。

「……っ、な、なんで?」

帰ってきたのは疑問符。

「うん?」

「なんで、えりの姉前、知つてるの」

「まだにおねまいなしやつくて肩を上させながら、べつにやんが不思議そびに尋ねる。

「へへ、なんでかなー?」

お姉ちゃん、魔法が使えるのかもねー?と笑つてやると、えつかちゃんが一瞬きょとんとして、今度は「うん?」と目を輝かせた。

か…可愛い…。

ふと見れば、隣の九条さんもちょっと驚いてるみたい。へらつと笑つてわざわざうつと、とだけ言つておく。

「お母さん、一緒に探すつか。お姉ちゃんの魔法で」

「いいの？……うん、探す？」

完全に泣き止んだえりちゃんの小さな手を取つて、あたしは立ち上がる。

九条さんもそれに続いた。そして、えりちゃんの空いてる左手をやさしく握つてやる。

「なんか完全に役じい取られちゃったなあ」

頭上から聞こえる九条さんの声は苦笑まじりだ。

「九条さんが泣き止ませてくれたからですよ」

じゃなきやあたし、話せなかつたし。

海にきてから2時間半。

今日の残りのあたしは、じつやう魔法使いにならなければいけないよつだつた。

## 1. 魔法使い誕生？（後書き）

ごめんなさい（――）とにかく1月は、最重要事項な死活問題があつたのです。でも、これからはまた週一更新していくね（  
^-^）曜日は水曜でお願いいたします

うべ。終息、そして暗転。 (前書き)

危ない！木曜日5分前（、 、汗

「へ。終息、やして暗転。」

魔法使い（とその弟子だとえりちゃんに認識されて）「九条さんとともに、三人連れ立つて、あたしたちは海から道路に上がった位置にあるみやげもの屋さんに行っていた。

なせりに来る」ことになつたのかといふと……話めつこ五分咲以前に  
さかのほ  
遡る。

「えりちゃんや、お母さんとばべりやうまい、お母さんなんか言つてなかつた？」

と、九条さんが尋ねた。するとえりちゃんはそれ以上ないへりこで、快活に笑つて言つたものだつた。

「嘘つてた！」

ええー？

もちろんあたしたちは驚いた。

「本物？なんて？」

「トマトー。」

「…………ん？」

「トマトー。」

「ト……？」

「うそ、トマトー。」

なおも笑顔のえりちゃん。

「お母さんね、えりと離れた的時候、トイレ行へって言つたー」

えりと…それって迷子つて言わなこんじや（魔法使い一味一回）

「う、うそ…えりと、ね？待つてゆつて言われなかつた？」

「言われたー」

「…なんで離れたかな？」

「分かんない」

…うそ。どうしよう。どう手えつけでいいんだ、コレ。

「つまり…えりちゃん自分がお母さんのせば離れたつてこと？」

九条さんが噛み砕いて、再度えりちゃんに聞く。

「違うよ、えり自分で来たんじゃないよ、えり後つけできただけだもん」

だけどえりちゃんはひづりだったのだ。

困り果てた表情で、あたしたちはアイコンタクトをとった。

えりちゃんが廊下で、ソリから先500メートルの地点へ  
る。砂浜から上がった道路沿いだ。

「後つけただけだもん」とこいつらの言葉からすると、  
行きはお母さんと一緒に、帰りは違う誰かと一緒にこの砂浜へ戻つ  
てきた」とになる。

でも一体、誰と？

150メートルの距離。来年小学校、つていう女の子が一人で  
歩くには結構「飽きる」距離じゃないだろ？

そりは思ひのだけれど、誰と一緒にたかなんて見当もつかない。  
それにソリで聞いちや、魔法使いの娘が廃る……！

なんてあつもしなじフライヤーが火と燃やしてこたとき  
あたしの皿の前を、あるものが横切つた。

皿を壁みはる。されば、ふよふよとこまだ空を泳ぎ続けてこるので。

「…………あ」

隣の九条さんも、同時に気づいたようだ。

「……やつか。もしかして。

えりちゃん……あたしたちも、えりちゃんがなんの後つけしてきたか  
知ってるよ。」

九条さんはふつと笑って、ひとつ頷いた。

九条さんはふつと笑って、ひとつ頷いた。

「とんぼ」

「……」

「とんぼの後、追っかけてここまで来たんだろ？」

そう。えりちゃんが後ついてきたのは、人じゃない。「とんぼ」だ。季節も九月上旬、気の早いとんぼならいくらでも出でてくる頃だらう。

「やうだよ、なんで知ってるの、ほんとに魔法使いなんだね、すごい」

案の定そうだったみたいで、田をキラキラさせぢやつてほんと、可愛い。

でもえりちゃん、将来きっとマシンガントーク……。

想像して笑えた。

「それでね、えりね、おみやげなの」

……ん？ 今またなんか突拍子もない単語が。

「おみやげ？」

苦笑して聞く九条さん。

うわ、対処早くしすゞこなあ。

あたしなんかまんま振り回されたいな。

「アリのおみやげなの、トイレ終わったらね帰る前買ひつて」

だからお店に行かつて買つてた。そつ続けて その直後、えりちゃんは唐突に黙つた。

「…おかあさん」

今のお話から思に出したのだらつ。ジコジコと顔は歪んで、だんだんと「…」「…」とこつ吐き声も漏れてきた。

あ、 やばい、 泣つ、

「…あ、 あああ、 ー、 おかあさん、 おかーさん」

「…ちやつたよやつぱり…」。

あたし、 ビー、 魔法使つよ馬鹿…。

くつわう、 不甲斐ない。

けれど、 直ぐにえりちゃんの泣き声は止んだ。

「ひ、 あ

」

…九条さんが、抱っこしたのだ。

しゃくりあげる小さな背中を、ポンポンと優しく手つきで叩く。  
「僕、えりちゃんがおみやげ買つて貰つたお店、分かるよ。連れていってあげる」

「う、ほんと? おかあさん…えりおかあさんに会える…おかーさん怒つてない?」

矢継ぎ早に尋ねるえりちゃん、マシンガントークは健在だ!

「へつ…、分かんないけど、きっと待つてねばお母さんもやがて来る」と囁く、よつ?」

どうやら九条さんもそれがおかしい様子、笑いを躊躇み殺しながらそれでも優しい声で答えていく。

「じゃあ、行く。お店、行く」

えりちゃんのちいちな手が、九条さんの首にまわされ、ぎゅうつとしがみついた。

「…」

と、まあ、こんな感じで今に至るわけなのだけど。

みやげもの屋さんには、とりあえず着いたその時はお母さんがいな

かつた。

また泣きだすかと思いきや、えりちゃんはすっかり忘れてしまった様子で、店内にある数々の品物に心奪われているようだった。

ガラスものやきらびやかなキー ホルダー。はたまた変な置物だったり。

中でもえりちゃんはキラキラしたものが好きなようで、ガラス製品に興味津々だった。

棚に手をかけて、あーとかうーとか言葉にならない言葉をだだもらしている。

ああもう、可愛いつ。

一方九条さんは腕時計を見ていて、一人手持ちぶさたなあたしだ。

何とはなしに「メッセージコーナー」なる一角で足を止めてみるとなるほど、メッセージコーナーだけあって、いろんなハガキやメッセージカードがディスプレイされていた。

どれも海をモチーフにしたものばかりで、見てるだけで心が和んだ。

やつぱりあたし、海好きだわ‥。

しみじみと再確認。

あとなんか面白いもの、あるかな。

最上部の棚を見ると、

「ウハ わあ」

な、なんてあたし好み！これ、欲しいー！

見つけたのはガラスの小瓶。市販薬のガラスピンくらいの大きさで、コルクで栓がされているものだ。

中には、丸められた真っ白な紙しきが一枚。

そう、映画とかでよく見るあれだ。

海な向かって「モーれウフフ」ってな感じのあれだ。

欲しいー！これまじ欲しい！

いつ使うのかとか聞かれても分からぬけれども！

何を書くんだとか言われても思ひ浮かばないんだけれどもー。

でも、憧れつてあるじゃなー！ロマンつてあるじゃなー！

つまりは、やうこつことなのよー。

ああ、でもこいつのつて意外と高いんだよな。

…こへり？ ピア、 600円ー

「うう…バイトもしてない女子高生には痛い…。

あ、でもコレすりじゃなくて欲し、

「これ、欲しいの？」

「うひゃああーー？」

な、な、な、なーーびっくりしたあーー一人の世界に入つてたのに、いきなり話しかけるから。」

「ぐ、九条さんっ？ いいいきなり後ろから話しつけないでください、しかも耳のそばでっ！」

まつかになりながら後ろを振り返つた。

なんのこじとへともいいたげな九条さんの笑顔が、そこにある。

うう、やっぱりうつ？

「買いましょうか、お嬢様」

はつとした。そうだ、あたしにはこの手があつたんだ！

棒倒しの勝者にえられた、特権。

「…でも、あの、命令とかで買つてもうつの違つてこつか」

あたしなんの分際で何言つてんのーーとは一瞬思つたけれど、本音だ。

「一ゆーのは、気持ちがあるから」  
「あつと嬉しいもののはずなんだ。

だから、勝ったから買つてしまひつ、とか。負けたから買つてあげる、とか。

…そういうのは、どうしても嫌だったの。

九条さんはあたしの言つたことこのを瞬時に掴んだらしい。

うんやうだよな。僕もそう思つ。

そう、静かに笑つた。

「でもね末羽ちゃん、だからだよ」

「へ？」

「そつやつて考えられる末羽ちゃんだから。だから『僕が』、『僕の意志』で、あげたいんだ」「

だからこれは、僕のわがまま。

ふんわりと笑つて言われば、返す言葉もない。

ぽーっとした思考のまま、思わず「はい……」と答えそつこなれば、同時に、この店のドアベルがけたましく鳴つた。

「えりー！」

えつ？

慌ただしい様子で店にかけこんできたのは、緩やかに波打つ黒髪で、上は白のカーディガン、下は水色のフレアスカートをはいた、まさかれもないえりちゃんのお母さんだつた。

「おかーさん！」

ぱっと嬉しそうな声が背後からあがつて、今の今までガラス細工を見ていただろうえりちゃんが、あたしたちの横を通り抜けていく。「もう、動くなつて言つたのにあんたは… つーヶガとかないの！？ 大丈夫なの！？」

「うん！ あのねあのお姉ちゃんとお兄ちゃんが魔法使いなの、だからえり大丈夫なの」

「え？ 魔法つか…」

困惑をみのお母さんの声が聞こえる。

ふつ、そりゃそうだ。なんのことか分かんないよね。

だけど、さすがはお母さん。えりちゃんの一言で事情を察したらしく、狭い店内のなかあたしたちの姿を見つけると、ぺこりと会釈をし「すいません、ありがとうございます」と言葉までくれたのだ。

呆気にとられながらも、あたしも笑つて「いいえー」と返せば、九条さんは「えりちゃん、すつぐくいい子でしたよ」と大人の対応をしている。

そのあと、えりちゃん親子は約束のおみやげの品を購入して、何度もおじぎしながら帰つていった。

帰つぎわ、えりちゃんから「ありがとう！魔法使いとその弟子！」と言わたことば、きっと、一生忘れない。

「やー、騒がしい子だつたね」

「はー。でも、楽しかつたです」

それに、子煩惱な九条さんが見れて、ぶつちやけ得した感いつぱい。

「それで、買つたの、買つたの。」

「あー、と…その」

まだ決められないあたしに、九条さんはぽんと頭に手を置いた。

「僕、ちょっとトイレ行ってくるから。それまでに決めといてくれればいーよ

あーあ… 気い使わせちやつたな。

心のなかではやつ思ひのこ、現実のあたしはただこくつと頷くだけ。

九条さんはそれを見届けると、「落とすと駄目だから」とあたしに携帯を預け、店内から出ていったのだった。

「はあ…」

で、そのあとのがたし。

正直、めちやめちやあのガラスピン、欲しい。九条さんもまあ言つてくれてるし…ちょっとひりー、甘えちやつてもいいかな?

なんて、考えてる。

今日の記念になるものも欲しいし。いいよね?

うん、よしぃ。買つてもらひやねー。

考えがまとまつたところで、気になるものがあった。

あたしはまずおずと手のなかに納まつている黒い携帯を見下す。  
わざわざからめちやめちや存在感出しまくつの、く、く、く、九条さんの  
けーたいつ！

妙に緊張しちゃうの気持ち、分かるかなあ…？分かんよねえ…？

あ、開けたい！パカッ、て開けちゃいたい！

いいえ、だめ、だめよ末羽つ。それは人としてやっちゃんいけないこ  
つ、  
、

ヴーッ、ヴーッ、ヴーッ。

「うはああああッ…！」

あたしは思い切りびっくりした。

メ、メールきた！いや、電話！？

どつちだか分かんない！！

いいの？いいの、コレ！？

この静かな店内中に、超響にちゃつてゐるだけビー。

「、心なしか店員の視線が痛い。さっき奇声もあげたし、何より、マナーモードにしても意外にバイブレーションつてひるせい。

仕方なく、あたしはバイブレーションを止めるべく携帯を開くことにした。メールだった。

でも…………やめておけばよかつたんだ。

あたしは死ぬほど後悔する。人のプライベートなんて、覗くもんじやない。

軽い気持ちで押した、決定ボタン。

受信したメールの送り主の名前は、

“黒瀬ひな”

…そう。

ひなのもの、だつたんだ。

。

## なな。消した想い

天国にいたはずだったのに、いきなり地獄に突き落とされた。  
…そんな感じだった。

つこわつさままで田の前で震えていた携帯は、寸分違わず明らかに九条さんのもの。そして、液晶画面に映っていたのも、間違いなくひなの名前だった。

嘘だ、まさか　　といつ気持ちと、なんとなく、ああやつぱりな  
といつ気持ち。

あたしの中身が何か真っ黒で空虚なものになつた気がして、田の前  
が霞んで見えなくなつた。

ああそ  
うか　　。

合点がいったのだ。

ここ最近のひなの様子。尋常じゃない『誰かとの』メールの数。あ  
たしへの態度。

やけに必死だったひなのメール相手は　　九条さんだったんだ。

あは…道理で嫌な予感がするわけだ。あのひなが本気で必死になつ  
てメールしてんだもん。なんか変だと思つた。

…ねえひな。どうして言ってくれなかつたの？それに、あたしは一  
体何に対してもショック受けてんの…？

ひながあたしにだまつて九条さんと連絡取り合っていたこと？

それとも 九条さんが九条さんでなくなるときのあの眼差しが、全部、ひなに向けられていたんだつていう、事実？

分かんないよ。あたしは つ、

チリンチリン。

ビクリと身体が震えた。

九条さんが戻つて來たのだ。

「未羽ちゃん、決まつ ..... どつしたの？なんかあつた...？」

変わらない彼の笑顔。今はそれを見るのが、辛い。

でも、だめ。知られちゃいけない。あたしが九条さんの携帯を勝手に開いたこと。

たとえ不可抗力だとしても、ひなと連絡取り合つていてることに気づいたことを、決して知られてはいけない。

大丈夫。受信完了画面は見たけど、メール自体は開いていない。表示は何も変わっていないはず。あたしさえうまくやれば。

「ううん、大丈夫です。なんにも、ないです」

ちゃんと、笑えた、はず。

九条さんは何か言いたそうな顔をしていたけれど、あたしがそれを遮つた。

お願いだから、なにも聞かないで。

…知らんふりしてよ。

「九条さん？ あたし、決めましたよ」

「…え？ と…」

「やだ、この短時間で忘れちゃったんですかー、もう。あれ

と、意識的に笑いながら指差したのはメッセージコーナーの最上部の棚。

「ああ。ガラスビン。どいつも？」

「…買って、くれるんですね？」

かがんで、挑戦的な目で下から覗き込んでやつた。

九条さんは一瞬目を瞠つたあと、

「お嬢様の、仰せのままに」

変わらない笑顔で、ほほえんだのだった

。

外に出てみればもう、太陽は夕方のやわらかい光に変わっている。

水面が陽射しを反射してキラキラと輝いていて、あたしは思わず目を細めた。生ぬるい風が頬を撫でて、髪を一房さらつてゆく。

みやげもの屋さんからまた砂浜に戻ってきたあたし達は、海に来てから二つち、ここで初めてゆつくり話をした。ここぞとばかりに今まで聞きたくても聞けなかつたことを聞く。

「あのう…」

「ん?」

あたし達は今並んで砂浜に座つてゐるわけだけど、こちらを振り返つた彼がキラースマイルでつい一瞬怯んでしまつ。

「ひへ、弱いんだつてばその笑顔…。

「九条さんつて、実のところ何才なんですか?」

「実のところ…。そこ、気になるところへ。」

「はいー・気になりますー。」

「…」

「…」

「あれ、何その反応。一十一だよ」

「…」十三?

「え？と…意外と若いん、です、ね？」

「や？そんなことないけど」

「うん…いや。逆に、思つてたより歳、うえなのかも？あれ？でも、やっぱり落ち着きようが二十後半みたいな感じだし…でも顔はやっぱ二十九にも見えるし」

「未羽ちゃん、声。だだ漏れだから」

「え…！」

恥ずかしい！

とつたに九条さんをみやれば、くつくつとのどで笑つていた。

あ、また…。こんな笑い方でもカッコいい…。

ひなは知つてゐるのかな。九条さんの笑い方。

ふとそんなことを思つて、すぐに首を振る。

今は、それより九条さんのことっぽい知りつ。時間がもつたいないし。

「それで、あの。誕生日とか血液型とか」

「うわ、なんかベタなのきたねえ」

「重要ですか」「」

「力いつぱいだねー。そんな知りたい?」

「わからん」

「誕生日は…九月三日で」

「ええー…三日前じゃないですか?」

あたしじんだけタイミング悪、

「うそまあ嘘だけど。本筋は十五日」

九条さんはじんだけ意地悪なんだね。うん…なんか分かってきただけだね?

でも、本気で焦つたんですねけど。しかも十五日って結局近いし。

「あと血液型は…」

と、いつもなげに続けるのは九条さんの口。

ええい、反応するのはこの耳かつ。

「末羽ちゃん、当てるよ」

「あたし…?」

「四分の一の確率でしょ。一発で当たらなかつたら、未羽ちゃん罰ゲームね」

何それ！－何そのめちやくちや不条理なゲーム？

あたしのメリッジトは果たしてあるんでしょうか！－？

「ちなみに罰ゲームとは」

「…『ハーパンハ～』」

キラースマイルで言いますか、それ！

「ほひ。何型？」

「ハ～」

「れだる～。ぱつと見A型っぽいんだけど…今日一日でその見解はあてにできなくなつたし。マイペースな所はBっぽいけどおおらかな感じがO型。もうひとつ、全部ひつくるめで変人な感じがAB型－！？」

「だから、瓶に出てるつてー。」

九条さんは大笑いした。

「僕、変人かあ～。未羽ちゃんに言わると正直ショックだ」

「そそ、そんなつもりで言つたんじゃありません！」

「分かつてる分かつてる」

片手を上げて制する九条さん。肩は今だに震えてる。…あたしに対する笑いで。無意識にふくつと頬を膨らますと、九条さんが「『めんすねないで』と淡く笑う。

「それで、結論は？」

「…… A」

色々考えたけれど、基盤として真面目な感じ、誠実な感じはやっぱり何を差し置いても A型な気がした。

答えを待つけれど、反応がない。

「あの、九条さん？」

「…はずれ。罰ゲームだね」

「はずれですか！？」

「はい、前髪あげて～」

「おでこ出しちゃ、と右手が伸びられる。

接近する骨張った、それでいて綺麗な手に、自分でもびっくりするくらい心臓が早鐘を打った。

ああでも今そんなことよつ…！」

「さよちゅ、ちょっと待つてくださいーほんとこやるんですか！？やるんですか！？あたし、デコピン無理です怖いです痛いです！」

「だーめ。約束でしょ」

なおも追随の手は止めず九条さんが完全に向き合って、左手であたしの肩を逃げられないように捕めた。

いつもならびきりある「んなシチューションも、今じゃ通用しない。『トロピカルマニア』がおるのよーっ！」

九条さんの指が額に照準を合わせ、

ああもう、ダメ…。

ぴたりと、止まる。

「嘘だよ、当たり」

「…ふえ？」

「A型だから、僕」

一瞬、言つてゐることが理解できなかつた。

え、えーがた？

…A型なの？

「 なつ、何でそんな嘘つくんですか？ あた、あたし、ほんとにドロップされるかと思つてー！」

涙田になれば、九条さんが焦つたよつにあたしの頭に手を置いた。

「 いのん、慌てぶりが面白かつたからつこ」

そのまま、くしゃっと頭を撫でられる。

ああ　どうせあたしはこの笑顔に勝てないんだ。

無言で首肯すれば、ほつとしたように力を抜いて、九条さんの身体が離れていた。　一瞬寂しいと思つたことは、口が裂けても言えない。

「 … 級麗だね」

一瞬の沈黙のあと、ふいに九条さんが咳く。

視線はまっすぐ海に向けられていて、見れば、沈みかけの太陽がまばゆいオレンジ色に輝いて、水面を照らし、雲に色を移し、世界を橙色に染めあげていた。

ほとんど無意識で、「はい…」と返す。

どこかぼんやりとしながら、それでもこの心地よい空氣に身を任せ る。

あつたりではあるけれど、その時確かにあたしは まつてほしい、心から、そう思つた。

時間が止

思つて、いたの。π

ピココリココ、ピコリココリ。

夢心地の空間は、突如として切り裂かれる。

着信は、九条さんだつた。

画面を見てつと考へ込んだあと、あたしに視線をよこす。

だれ?...まさか、ひな?

あたしの不安そうな表情から心中察したのかどうかは分からない。でも、電話に出るかと思いきや、九条さんはそのまま携帯を閉じて、ポケットに戻そつとしたのだ。

「で、でなくていいんですか!?」

「うん」

あまりにも迷いなく答えられるものだから、逆にこちらのほうが不安なつてしまつ。

出たほうがいいんじゃないの…?だって、メールじやなくて、電話だよ?何か、どうしても大事な用なんじやないの?

そつは思つけれど、言えないあたしがいた。

…………「うん。言いたくない、あたしがいた。」

着信はそれから10秒程して止まつたけど、そのあの九条さんは、あの、あたしが知らない表情をする彼になつてしまつた。

着信がひなだつた保証なんてない。でもあたしは、ひなだと信じて疑つていなかつた。嫌な予感つて、当たるものでしょ？

ふ、と自嘲氣味な笑みが零れた。

脳裏に、あの小悪魔的な笑顔が浮かぶ。

高校入つて、初めて芯から仲良くなつた友達。そりや、ちょっと手に負えない所はあるけれど、やりすぎなところもあるけれど、ひなはいつだつてあたしのためを思つて全ての行動を起こしてくれていた。

クラスに馴染めないあたしを、あつという間に輪に引き込んでくれた人物。正直、泣くくらい嬉しかつたのを覚えている。

あの時からあたしはひなのが大好きで、あたしたちは 唯一無二の、親友だ。

… 今度はあたしの番じゃないの？

あたしが、ひなのために何かしてあげる番じゃないの…？

そうだよ、大丈夫。… あたしは、まだ、引き返せる。

「… 九条さん」

「ん？」

「電話、かけ直しましょ、ひみつ。」

笑って言つ。

「でも」

「あたしのことば、気にしなくていいですから、ほら」

「…本当に、いいの」

「だあいじょーぶです、てばー逆にあたしの方が気になつて仕方  
ないんですもん。ほら、早く」

急かすと、渋々と言つた感じで九条さんは腰をあげる。

「じゃあ僕、車の方に行つて話してくるナビ…」

「はい、時間も時間だし、あと少ししたらあたしもナビ行きます  
から。遠慮せずに電話して下さっこつ」

笑顔で、九条さんの背中を見送った。

「 つ、」

一人になった海岸で、あたしはおもむろに鞄からあるものを取り出  
す。

ガラスの小瓶だ。

さつき、お店で九条さんには買つてもらつたやつ。

眼前で左右に振ると、中に入った丸められた純白の紙が、カラカラとかすかに音をたてて転がつた。

ガラスを通して見るオレンジ色の太陽が、ゆれて、霞んだ。

「ガラスを通したから光が屈折したんだと思った。」

違つた。涙だつた。

「はつ  
、」

息を止めて、声を殺して。後ろをいく、九条さんに気づかれないようだ。

頬を伝わる幾筋もの涙を乱暴に手の甲で拭つて、それから大きく息を吸つて次に取り出したのは、セットで買つてもらつた油性ペンだ。

コルクの蓋を開けて、紙を取り出す。膝のうえに小さな紙を広げて、一気にペンを走らせた。

『好きです』

書いたのは、たつた一言。

でも、この先口にだすことはないであろう、一言。

そうだよ。あたしは、九条さんが好き。

いま、この画面になつてはつきり自覚した。

馬鹿なあたし。いつだってタイミングが悪いのだ。

それから、震える手をコントロールしながら首からネックレスを外した。それも紙と一緒にガラスピンに入れて、蓋をする。

今、この時。確かにこの思いが存在した証を、残すために。

それからあたしは立ち上がりて 勢いよく、海に向かって小瓶を投げ入れた。

小さなガラスピンは、幾重にも重なる波に飲まれて、消えた。

## はい。あふれた想い

帰りの車の中では、終始他愛の無い話をしていた。何事もなかつたように、笑つた。…あたしの『想い』は、あの小さなガラスビンと共に消したから。

時折、九条さんが黙り込むことがあって、最初は何か感付かれたのか、それともまださつきの電話の件を気にしているのかと思つたけれど、どうやら違つたりして。彼も彼でまた、あたしに話したいことがあるようだつた。

口を開きかけては、逡巡して閉じる。その繰り返し。

…ひな関係、かな。

あたしも未練がましい。想いは捨てたはずなのに、聞きたくないと思つてゐる自分がいる。

結局、最後まで『その話』をすることはなく。聞くこともなく。

車は、今朝乗せてもらつた場所に到着したのだった。

「今日はありがとうございました。楽しかつたです」

色々衝撃的なことはあつたし、切ない想いも沢山したし。それに、きっと生涯忘れないようなこともあつたけど。

でも、今日のあの時間が楽しかつたっていうのは事実だ。

あたしはシートベルトを外して深々と頭を下げる。

「どういたしまして。僕も楽しかった」

「そうですか、良かつた…」

「独りよがりじゃなくて、良かつた。九条さんご笑つてもうりで… 良かつた。

「それじゃあ、これで。月曜、今度こそワイヤーシャツ返しに行きますから」

人質みたいにとつてあつたあの白いワイヤーシャツとも、なんのまつたくらばだ。

「月曜…か」

九条さんが呟いて、嘆息する。都合悪いのかな?

「…未羽ちゃん」

「はー」

「あの〜。もし、返せない事態になつたら  
しないでね。やつしたら未羽ちゃんこあげる」

返せなくても気が

「え…」

返せない、事態?何それ… 一体どんな?

「よく、わかんないですか…」

「返事は」

「え」

「返事は」

一度繰り返す。肯定以外の返事を受け付けない妙な迫力があつたから、はいと返事をした。

すると、九条さんが少しだけ泣き笑いみたいに笑つた。

胸がしめつけられた。

どうして今、そんな顔するの。

手を、伸ばしたくなるじゃない。

…触れたく、なるじゃない。

想いを振り切るように、取っ手に手を掛けて扉を開ける。

「さよなら。ありがとうございました」

「…うん。ばいばい」

勢いそのままにドアを閉めれば、車のエンジン音が遠ざかる。

胸の痛みには気づかないふりをして、あたしも歩きだしたのだった。

その日の夜。あたしは、泣きながら眠った。どうにかな、と思ひくら涙を流した。

あのワイシャツを抱きしめて眠りたかったけど、しづくちゃんになつてしまつと思うと実行できなかつた。だから、ひたすら氣の済むまで泣いた。

次の日の日曜は、ただぼーっとして過ごした。何もする気がおきなかつた。夜になつたらまた涙が溢れて止まらなかつた。

そのまま夜が明けて、月曜の朝になつた。

「未羽ひ~どーしたの、それつ」

「ひな」

朝教室に入つて開口一番、言われた言葉がこれだ。

う…やっぱり腫れた目元は「まかせなかつたみたい。

と、あたしの複雑な胸中なんかいざ知らず、次の瞬間ひなはこんなことを言つてのけた。

「九条さんがらみい~? まつたく未羽も隣におけないねえつ

……はつ、はああああ!?

このムスメ、いつたいどの面をぱて……つ……「ヤーヤ」した面をぱてるけども……あたしが一体どれほど想いで九条さんを諦めたと。

……昨日おととい泣き腫らした甲斐あつとか、どうやら憤慨できるくらいには情緒が安定したらしい。

「……つ」

「?みーうー?」

落ち着け。ひなはあたしが一人の関係に気づいたことを知らないんだから。

ここは何事もなかったように、明るく。

「九条さん? あの人は関係ないよ」

……つまく、笑えた。

「……」

……あれ? 予想と違う反応。何その顔? なんでそんな難しそうな顔してんの?

「ひ、ひな?」

「ねえ末羽。土日のつむじつか、九条さんと会つたりした?」

「え……」

「答えて。会ったの？」

…「…」の場合、正直に答えるべきか。

一瞬迷つて、すぐにはかぶりを振つた。

答えは出でる。ひなに嘘はつきたくない。…あつこたといふどうな相手に隠し通せるとも思えないけど。

「…うそ、会つた」

「…や。それで？なんか言つてた？」

いつになく真面目なひな。

ああやつぱつ……。

ずしんときだ。分かつていてことを無駄に再確認しちやつた感じ。

「…うん？大丈夫、九条さん何も言つてないよ」

「…。ふーん？ならいいけども」

そのまま自分の考えに没頭し始めたひなをぼーっと見ていると、始業の鐘が鳴つて聖子ちゃんが教室に姿を現した。

「聖子ちゃん來たよ」

まだ思考に耽りながら、ひなは自分の席へと床つてゆく。立ち話状

態だったから、あたしも自分の席についた。

放課後、九条さんのところへ行かなきゃね。

鞄の上から、中にあるワイヤーシャツを意識して撫でた。

ばいばい。

「ひな。ついてきてほしにんだけビー…」

S H R が終わつた後、すぐさまあたしはひなに声をかけた。

「んー？ 九条さんとのこりあ？」

帰り仕度をしながら答えが返る。

「…ひん。今日、ワイヤーシャツ返すつと思つてさ

「えー？ 返しちゃつのお？」

「…そりゃあ、ね

言いながら、そういうえば昨日何か九条さん変なこと言つてたなあと  
思い当たつたけれど、彼が言つのような事態は微塵も期待…じゃない。  
想像できなかつたから、ひなには黙つてもぐく」とさする。

「別に行つてもいいよ？」

「おつがい」

あたしは 今田、ひなも車屋さんに連れてって、九条さんと会わせて、何も知らない振りして もちろん軽く、連絡取ってるんでしょ？くらいは言つたうえで ひなの背中をそれとなく押すつもりだった。

むしれ、それへりこ早へへりこじへれなわやあたしが諦めつかない。

だから、ひなが帰り支度終わるのを待つてすぐに教室をでた。

「五時まで時間あるじゃーん。どうかんのー。」

「んー… いつものマック行こつか? あたし、久しぶりにひなの話いろいろ聞きたいなあ。どーセ色々えげつない情報持ってるんでしょ」

「えげつないとはしつれーな！えつへん、しょうがないなあ。聞か

そう言って彼女は不敵に笑う。やつぱり、ひなは「一でなくちゃ。」  
「よし、決まり。行きますか」

「れつじょうじ」

そんなこんなで五時二十分。

あたしとひなは、揃つて石段の上に腰掛け九条さんを待つていた。  
ちなみにマックで聞いた様々ひな情報は、やっぱりえげつか

つた。

今は、ずっとワイシャツを返すときにもう一つの会話を、頭のなかで何度も繰り返し練習していた。

だめだあ…何度も練習しても泣きそう。ひなだつているのこ。

唇を噛みしめて俯いた。

ふと見れば、腕時計の針は五時三十五分。

…九条さん、遅くない？

もう少し待つてれば来るだろ？と思いついた。けれど その日、待てど暮らせど九条さんはこなかつた。次の日も。その次の日も。返せない事態になつたら返せなくとも気にしないでね

あの時の九条さんの言葉が頭をよぎる。

まさか、そんな…嘘でしょ？

…茫然自失としたまま三口が過ぎ。事態が動いたのはそんな時だつた。

「未羽ー。」

教室に入るなりそう声を荒げたひなが、次の瞬間信じられない言葉を発する。

「九条さん、転勤したんだって！…」

…一瞬。何を言われたのか、分からなかつた。

「て…転勤？」

「そりゃ。隣の隣の町に異動したんだってやー。」

「…」

…そうか。だからいくら待つても出でこなかつたんだ…。

「未羽、いいの？」

「な、にが？」

「隣のそのまた隣の町だなんて、あたし達が簡単に十分か二十分で行ける距離じやないよ！？」

「…そうだけど…ひなこそ」

「は？」

ひなこそいの？

喉まででかかつた言葉はかたちにならず。

…ただただ、ひなの剣呑な視線が痛い。

「あたしが、何？」

てか…なんであたしが責められるような形になつてんの? もとせといえ、  
いえ、ひなが

「はーい席に着いてーー！ R始めるよー」

びく、と過剰反応が起じた。

「…とにかく。ひな、あたしはもうここから。九条さんのことね…  
もうここでの」

会話をシャットアウトする。ひなはそれ以上何を言ひひともなく、  
自分の席へ戻つていったのだった。

授業中、先生の話なんて一切頭に入つてこなかつた。

頭に思い浮かぶのは 九条さんのことばかり。

水かけられて謝つてくれたときの、申し訳なさそうな顔。

ワイヤーシヤン貸してくれたときの、少し照れた顔。

神々しくさえあるキラースマイル。

少し悲しげな微笑。

眞面目なときは一層際立つ綺麗な顔の造作。

車の運転をした時の仕草、その時の会話。

意外に意地悪だつて「」とか、子煩惱など「」。

それから やむじへ 未羽立ちやんつて呼ぶ声。

全部全部、覚えてる。

それなのこ、忘れなきやこけないの?

まだ、こんなに 好きなのこ。

「 」

そうだよ…。簡単に諦められる訳ない。

あたしだって、好きだつた。好きだつたんだもん…。

「つ…」

涙が溢れた。あたしにはまだ、伝えてなことがある。

なんだつてしまだこんなに涙たまつてんのよ…。

いい加減枯れたらどうなの。

まだ授業中だつたから机に顔を押しつけて、声を殺した。隣の席の子が様子を伺う気配を感じたけど、そんなことに構つてられなかつた。

じまくしゃべりはじめていたと、肩を叩かれ、顔を上げる。涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔。

「未羽、わつあは！」あ……わやつ。なによおその顔つ

いつの間にか昼休みになっていたらしい。

「ひな……」

名前を呟くとまた涙のように涙が頬を伝つた。

「どうしたのよおつーーー」の授業時間の間に何が

「ひな、あたし、あたしやつぱつ

「待つて未羽！聞くからー話は聞くからひとつと待つて！人のいいところへ行こつ？」

焦つたようつにさつ一気に言つと、ひなはあたしを屋上に連れ出した。

「ふいー。ヤーフヤーフ

「……なんでわざわざ」

「だあつて旨興味津々に聞き耳たててんだもーん」

これで周りに色々情報流れちゃ情報屋のあたしの名が廃るのよねー。

とかなんとかひとつじゅうひな。図太い。

「で、なあに、話つて」

振り返るひなは最高に可愛い。

でも　　だめなの。これだけは　　譲れない。

「あたし……、あたしやつぱり九条さんが好きだよ。諦められない。何度考えてもだめ。ひなのことも大事なの……でも、九条さんのことが、好きで仕方ない」

一気に言つた。正直な気持ちを全部。

そうなると、ひなの反応が怖かつた。怖かつたのに　　恐る恐る視線を合わせれば、ひなは……笑つていた。

あの、小悪魔的笑顔。

「ひひふふう～、やつと言つたかこの意地つ張りい」

つん、と頬をつつかれる。

え？えつ？

「未羽が九条さんのこと好きなのなんて、初めから分かつてたよー。はいこれ」

田の前に掲げられたのは一枚の小さなメモ用紙。

「九条さんの新しい職場の住所。行くでしょ？」

間髪入れず「紙を奪」とる。

「わーす」に反応

「これ…どうして」

「野暮な」質問。黒瀬ひな様をなめんじやない

にかつと笑つて眼前にピースを突き出す。

「がんばれっ」

「でも」

ひなは？

「あと何か変な誤解してるみたいだから言つとくけど。あたしと九条さん、特別な関係なんつにもないからね。勘違い。そり、はー やーくー」

「でも、学校も…」

「未羽熱あるんじゃない？大変、早退しなきや」

大仰に言ひ。

「…あーうん、やつかもっ。あたし、帰る」

先生によりしく階段を掛け降りた。

一度だけ振り返るとひなが手を振っていた。

ありがと、ひな。

賭けてみよう、自分に。

見上げた空は、抜けるように青かった。

## さあ、幸せをつかむために【最終話】

学校を出てすぐ、あたしは駅に向かった。確か電車があつたはず。出でくる時に教室から鞄は持ってきたから、最低限必要なものは手元にあった。

路線図を見る。駅、見つけた。料金もそんなに高くない。

電車は後五分で来る。切符を買って改札を通り、ホームに入った。辺りの景色を見回すと、平日の昼だから人はまばらで、閑散としている。

静かだ…。

息がつまっていたことに気づき、意識的に息を吐いた。

ここまで来たらもう後戻りはできない。進むだけ。

ホームに電車が入り、音を立てて扉が開く。妙に緊張しながらそれでもしつかりした足取りで、あたしは電車に乗った。

想いを伝えるって決めたんだから。頑張れ。あたし。

「えつ、いない？」

意表をつかれる言葉だった。

二十分钟。予定通りの駅で降りたあたしは、ひながらも「らつたメモを頼りに町を歩き、今の九条さんの勤務先であるといつ支店にたどり着いていた。

それなのにいのだという。時刻は三時。普通ならまだ仕事してゐる時間だ。

「いないつて、あの、今日休んでるとかですか？」

店の中にいた、人の良さそうな中年の男性を捕まえて事情を聞く。名前は村上さん。最初はびっくりされたけど、あたしのあまりの必死さに真面目に答えをくれたい人だ。

眼鏡をかけてて白髪混じりの、柔和な笑顔の男性。

「休みじゃないんだけれどね。彼は今日午前上がりなんだ」

「じゃあさつきまではいたんですね？」

「そうだね」

思いつきり入れ違いじゃん。やっぱあたしつてタイミング悪い…。

せつかくの決意が崩れそう、と肩を落とす。

「君は…見たところ高校生だけど。どうしてこんな時間にここにいるのかな。しかもその制服は…この辺の学校ではないよね？」

ほほ笑みながら質問される。全然嫌味な感じがしない優しい言い方

だつたから、つい、

「あの… 幸せをつかまえにー。」

「…………」

なんて一ト前なことを言つて、きょとんとされてしまった。

おじさんはすぐに元の優しい笑みに戻り、ゆうくつと頷く。

「それは 大事なことだ」

ほつ。

「だけどね、やつぱり学生の本分は勉強だ。それを忘れちゃいけないよ」

「…………はい」

重みのある言葉だなあ。

「だけど見たところ、今日の君は風邪で学校を早退したらしく」

「ー。」

「それなら」の時間町にいるのも納得だ

「あ… ありがとうございます」

それから と彼は続ける。

「九条くんは今日、行く所があると言っていたよ

「え…」

「 海へ行くと言っていた

それを聞いた瞬間、あたしはまた泣きそうになつていた。

まだだ。まだ泣くな。

「…それ聞けただけで、充分です。ありがとうございます。」

丁寧に頭を下げる。すると、その頭を優しく叩かれた。

「幸せ、つかんでくるんだよ」

「つ、はい…！」

その会話を最後に、あたしは店を飛び出した。

目指すは海、あの日の場所だ。

もう一度駅まで戻つて、今度は海の最寄駅に停まる電車に乗つた。

駅名は「」の前海に行つたときに道路から見えたから、確認済みだ。  
到着までの五分が、やけに長かった。

「いた……」

電車を降りて道路を渡り、眼科に砂浜を見下ろす。人っこひとりい  
ない中、微かに動く背中は簡単に見つかった。

九条さんだ。間違いない。

後ろ姿を見ただけで鼓動が高鳴り、気持ちがはやる。急いで階段を  
駆け下り、スカートの裾がはためくのも、跳ね返る砂が制服を汚す  
のも気にしない。今はただ 彼のところへ。

距離があと五メートル位のところで足音に気づいた彼が振り向いた。

「なつ 、未羽ちゃん」

顔がどうしてと言っていたけれど、今のあたしにその疑問に答える  
余裕はない。

ああ…九条さんだ。九条さんが目の前にいる。

あれほど待つても、会うことの出来なかつた彼が。

今、じうじて あたしの名前を呼んでくれている。

視界が歪んだ。

どうして今まで分からなかつたんだろう。 あたしはこの人に、  
一目惚れしていたんだ。

水をかけられたあの時から。ワイシャツを貸してくれた、あの時か

出合った瞬間から。

「ちよ、未羽ちゃん？」泣いて

「好きです」

「…え？」

「好きです、好きなんです。あたし、九条さんの「じがじつじょ」もなく好きなんです」

「ちよ、」

「こきなり」めんなれ、でももつだめです、好きなんです。好きで仕方な

「ちよっと待つて！」

いつの間にか五メートルあつた距離は詰められていて、あたしは両肩をものすごい力で掴まれた。それではっと我に返る。

あたしは今、何を。

「分かったから。分かったからもう、勘弁して」

やつぱり迷惑なんだ…と涙がぼろぼろぼれた。

「ああっ、違う違う、そつじゃなくて…」

「…？」

「じゃあ…どういって？」

「その…二十も過ぎるとそんな率直に言われることがなくなるから。  
…恥ずかしくて」

掴まれた肩から腕へ、首筋へ、顔へ。おずおずと視線を巡ると、言  
われた通り九条さんの顔は 赤かった。

少し、だけど。

それを認めた瞬間、瞬時に羞恥心が沸き起つた。

あたし、勢いに任せてなんて告白を…！

自分の顔も熱を持ったのが分かる。

「…………」

「…………」

双方沈黙。九条さんが掴んでいた肩を放し、さすがなく距離をとつ  
た。

その沈黙に気まずさを感じ始めた頃。

「ふつ…」

九条さんが笑つた。

「…な、何ですか」

「いや…黒瀬さんて凄いなと思つて」

「えつ…」

ひな?なんで「ひな?やつぱつ、やつなの?」

また視界が潤んで、そしたら焦つた九条さんが慌てて言葉を付け足した。

「違うよ、そういうんじゃなくて…その、今回の「ひ」、実は黒瀬さんに頼まれたんだよね」

「…頼まれた?」

「うん。異動のこと、黙つててごめんね未羽ちゃん。本当は今週転勤すること、未羽ちゃんと会つた時から分かつてたことだつたんだ」

「じゃあ　書つてくれたってよかつたじゃないですかー!」

あたしの声が午後の砂浜に響く。

「僕も何度も書いたと思ったよ。あの田海に誘つたのは、その為もあつた」

「あつ

」

だからあの田丸さんは、何度も口を開いたり閉じたりしていたんだ…。合点がいった。

「言おうと思つたんだ。でも、黒瀬さんに止められた。  
から言つてくれんなつて

頼む

「…どうしてそんなこと」

「『未羽は自分の気持ちも分かんない二ブチンだから』って」

「なつ…」

「それから、同時にいつも言われた」

異動のことを黙つて姿を消せば、未羽は自分の気持ちに嫌でも気づくから。やつなつたらもう二ついちのもんで、九条さんの職場まで追つ掛けても好きだつて言いにいきますよ。だから、今は黙つてくれださい。絶対、言いますから。いえ 言わせますから。

「なんかもう、色々すこじよね。でもやつぱり僕だつて好かれてる保証はなかつたし、黙つていなくなるのは未羽ちゃんにかわいそうだと思った。だから言おうとしたんだよ、あの日のうちに

「それなのに 九条さんは遠い田をした。

「我慢できなくて言おうと思つたび、黒瀬さんからジャストтайミングでメールやら電話やらくるんだもん。おうち言えたもんじゃないよ」

九条さんが苦笑する。

メールやう電話……。

じゃあ じゃあ、もしかして。

「ひなと連絡取り合つてたのは、その為……？」

「あれ、氣づいてたの」

「えつ？あの、氣づいてたつていうか……」

微妙な感じに口籠もあるあたしに、九条さんは「ああ」と笑った。

「あの時か。携帯預けた時にメールがきたんだね」

「う、その……はい。勝手に見ちゃってすみません」

「いいよ。不可抗力でしょ？それ……返事してもいい？てゆうかするよ」

「 つー

いきなりの話題転換に、おさまりかけていた鼓動と体温がまた急激にあがつた。

かつと身体が熱くなる。

自転車とかで「転びそうになつた時に、一瞬身体がボツとなつて心臓がばくばくする感じにす」く似ていた。

はい、と返事をしたけれど語尾が裏返る。

緊張して、怖くなつて、下を向く。目を瞑る。

だけど、耳に届いた言葉は。

「 僕のほうが先だつた」

完全にあたしの度肝どかんを抜くものだつた。

「 … は？」

思わず素の咳きが出たほどだ。見ると、九条さんは苦笑している。

「 未羽ちゃんは氣づいてなかつただろ？ けどね、僕は君のこじずっと見てたんだよ」

「 ??？」

「 … びっくりした？ 每朝決まつた時間に会社の前を通る女の子のこと、ずっと見てたよ」

言つてから九条さんは指折り数え始めた。

段差でつまずいたでしょ

鞄の中身ぶちまけたでしょ

信号無視したでしょ

ああそりいえば一回一時間くらいの大遅刻したことあつたよね？

あれ僕事務所の中から見てたんだー

あの時大丈夫だった？

九条さんの口から出てくる言葉は、全部見に覚えのあることばかりだった。心配までしてくれるところオマケつきだ。正直、顔から火が出る程恥ずかしい！

「あと……」

「どうやらまだ続くらしいあたし観察日記に、慌てて歯止めをかけた。

「いいいーですっ。もうこーですっ」

「そ？……じゃ違う」と教えてあげる。未羽稚ちゃんも、僕との初対面の仕方覚えてる？

「…へ？そりゃあ覚えますよ。忘れられるわけ、ないじゃないですか」「

あんな衝撃的な出会い方。あたしでなくとも忘れないに違いない。

「九条さんのまいた水が、間違つてあたしにかかるちやつたんですね」

あの瞬間の情景が、脳裏にまざまざと思い浮かべられた。

「それ。実はや……」

一皿の葉を切つて、視線を伏せる九条さん。

「な、なんですか……？」

「間違ったんじゃないってわざとなんだ

」

「

……またもや舌を、失った。

「ど、どうして

「ちつきも言つたじさん。僕は、ずっと前から君のことを見てたつて

「…つ

「じめん。でもわざとつて言つと語弊があるかも……自分で無意

識にやつてたんだ。また、君が僕に気づかず通り過ぎてしまつ。そ  
うゆつたら、なんかいつ、手が勝手にバシャッとな

バシャッとな、の所は、一瞬にパンタマイムつきだ。

……それが本当なら。うわあ、なんかもう。

「……つ！

「わっ

抱きついた。もう我慢の限界だった。

「いいんですね？九条さん、あたしのこと好きだつて  
う思つて、いいんですね？？

そ

知らず知らずのうちに涙ぐんでいた。

…嬉し涙だ。

九条さんの胸に顔を押しつけて、嗚咽をこらえる。

頭に柔らかい感触。手を乗せられていた。

「うん。僕は、君のことが好きだよ」

そのままぽふぽふ、と頭を叩かれれば涙は増えるばかりで。

「ふつ…、うわあん」

良かつた…。気持ち伝えて、良かつた…！

村上さん。あたし、幸せつかまえましたよ。

抜けるような青空の下、あたし達はいつまでも抱き合っていた。

それからあたしが落ち着くのを待つて、一人で海を後にした。

帰りは九条さんの車で、あの日あんなに暗く見えた外の風景が、やけに鮮明に色を映した。

右手は九条さんに握られている。

透真、と名前を呼ぶと、九条さんが凄い勢いで吹き出した。

あまりの慌てようが、なんだかすゝじへ愛しかった。

「ナヒニエば、シャシビツすればこいですか？」

「あげる」

「ほんとですね？あたし着ちまわる」

「いいよ。その代わり僕はこれもひつかひ」

そう言つて眼前に差し出されたのは……あの田あたしが海に投げたはずのガラス瓶だった。

「なつ……えりうじてそれを」

「拾つちやつた」

「ええー。」

「知らなかつた。未羽ちゃんこんなに僕のこと好きだつたんだね」

やつぱり九条さんは……極上のキラースマイルだった。

「ああ、あたしはきっと　　この笑顔には、一生勝てないに違いない。  
い。」

わざわざ。幸せをつかむたのこ【最終話】（後書き）

読んでくださりありがとうございました（^\_\_^）／物語はひとつ  
まずこれにて終幕です。遅筆でいいません。来週水曜、すぐにこれ  
の番外を載せるので、よろしければそちらもよろしくお願ひ致しま  
す。最終話が終わつた直後からの話になります（^\_\_^）

すひとねり。未羽と九条と黒瀬ひな。

いつから氣ついてた、って最初から。

ちなみに連絡先交換したのも、初めてあの人会った日の日から、  
だつたんだけどね。

『S.i.d.e・黒瀬ひな』

「ちよつとひなつ」

「なあ」「へ〜

「なあに、じゃない。またあんたつて奴は九条さんにあることない」と吹きこんでつ……。

「つふふー。全部あることでしょお?」

「なお悪いわー!」

季節は初秋。十月。昼休み。あたしは、今日も自分の情報網を駆使して未羽で遊んでいた。

「あつれえ、そんな」と言つていのかなあ、未羽。キュー・ペッシュド  
るま』しつれーだよ?』?

「うぐう…」

「うふ もうてまた色々聞か出したいこともあるしど… 屋上に行いつかつ？」

にっこり笑つて言つと、未羽は苦アい顔をしながらも大人しく後ろをついてきた。うーん、素直でいいねつ。

「でえ？ 何か進展はあつたわけ」

クラスメートに情報が漏れないように場所を屋上に変えたのち、あたしは早速未羽に詰め寄つた。

「し、進展で」

あたしの見解ではあ、未羽は奥手だけど思い詰めれば突つ走るし、九条さんなんて確かに紳士だけどああ見えて結構押し強いと思つのね？だから割と早くいいとこまで進んでんじやないかと思つわけだけどお。そこんとこビーなの？

そう一息に詰めつと、未羽は睡然としていた。

「な、なんぞのこと」

「んー？ 九条さんが実は押し強いつて話い？」

「…とかそこいらへん」

「まだまだねえ。あーゆう表面二口二口ひののが、一番腹黒かつたりするんだよお」

言つてやると、単純な未羽は黙り込む。

「でえ？九条をさつて激しきの？」

「はっ？」

顔真っ赤にして。ほんと、未羽つていじり甲斐ある。

「うふつ、これはただ的好奇心で聞いてるだけだから。九条をさつて、激しいの？どーなの？」

「待て待て待て待て何の話よ！」

「何つて…もちろん、ヤ」

「待て言つな！羞恥心ないわけ！？」

「あるにはあるナビ…今は発揮されてないかな。で、答えは？」

「へへへ、したことないから分かりません！」

「してなこのお？」

「そのつまらんみたいな反応やめで

「じゃキスんときまっ！」

矢継ぎ早に質問する。「——ゅうのは考える隙を」「えいやダメなのがねー。

「かつ…関係ないでしょおー！」

「大有りだもんつーや、ビーなの」

にじり寄ると未羽は顔を真っ赤にして黙り込んだ。もしかしてキスされてるときのこと思い出してるな。

「し…」

「し?」

「死にやつて、なる」

蚊の鳴くよつた声で耳に聞いたのは、そんな言葉だった。

「う…う、つまつ息もできないくらい激しいんだっ」

「違うわーや、確かに息できなくて苦しこともあるけどー…そつなつたら休ませてくれるしー…そつじやなくて精神的な問題なの」

…あたし的には「休ませてくれる」っていうのが気になつて仕方ないところだけ、突つ込まないでいてあげよつ。

「ビキビキしゃさぎー… うへやつ?」

「アハハハ」

「……のわけだねえ」

「あんたが喋らせたんじゃないつ」

「うるせー。この、健気に毎日もじりたワイヤーシャツ着やがつて  
～！成敗してくれるわ」

隣に座っていた未羽のワイヤーシャツの襟を掴むと、未羽は「やめて～」  
と笑う。ひとしきりじやれ合い、笑つて。ふと、未羽が眞面目な顔  
になつた。

「未羽？」

「ひな……あたし、本当に良かつたんだよね？」

「え？」

本当に良かつた？なんのこと？

「あの時ひなはああやつて背中押してくれたけど……本当に、九条さ  
んを好きなわけじゃなかつたの」

一瞬なんとか考えて　　すぐに理解した。

「……ばつかだねえ。まだそれ気にしてたの？だからあ、そんな  
んじゃないって」

「でも、あたしと九条さんが会つたつて知つた時ひなすごい渋面作  
つてたし」

……ああ、未羽たちが初めて一緒に海でかけたときのことかな、これ  
は。

「あれはね、未羽の様子おかしかったから、九条さんが我慢できなくなつて転勤のこと言つちやつたんじやないかと思つてさ。そーなればあたしの『未羽に告げよつ作戦』もパアになるわけでしょお?だからだよ」

まあつたぐ、このムスメは本当疑り深いつてゆーか、なんてゆーか。つまるところ、優しいんだよねえ。

あたしはにやつと笑つて未羽の額を小突いた。

「心配」無用。あたしは、未羽が幸せになつてくれて本当に嬉しいんだから。一生ラブ・ラブしてよ」

「ひな……」

「それにねえ、あたしにはもつといい男がこれから先現れる予定なの!九条さんなんかめじやないよ」

言つと、未羽が、やつと晴れ晴れと笑つてくれた。やっぱり未羽はこの笑顔でなきや。

「うん。だよね。あたしもそいつ」

「でつしょお?ち、戻つて」飯食べよー」

あたしはポン、と未羽の背中を叩く。

季節は初秋。十月。昼休み。今日もあたしは大好きな友達が傍にいて、元氣で、幸せ者だ。

君はそんなことない、って言つたけれど。

僕はいつだって君に関することは、余裕なんてないんだよ。

### 『Side・九条透真』

「そういえば九条さん。前まで九条さんがいた仕事場つて、幽靈出ます？」

それは、一度田の海からの帰り道、僕の車の中のことだった。

つこせつき彼女から呪由をされて、僕も気持ちを云々して。

それで、どうして車の中でそんな方向の話題になるのか、全く分からなかつた。

「ええと…どうして？」

「あの、だつて…わざわざ初めて会つたとき的話、したじやないですか？」

「海で『水かけたのはわざとだ』ってバラしたときのこと？」

「…、はい。それで思い出したんですけど、あの後更衣室でシャツ着替えるとき、扉がドンッて鳴つたんですよね。だからポルター ガイスト！？とか思つて…」

すると未羽ちゃんは答えない僕を見て、「いや、そんなわけないです。あはは、忘れて下さー」と慌てて訂正をした。

「いや違う。答えなかつたんじゃない。」

答えられなかつたんだ。

だつて

「あ、あの、九条さん？」

「…未羽ちゃん」

「は、はいっ」

「…僕はあそこで五年いたけどね、そんな話一度も聞いたことも見たこともないよ?」

笑つて言つと、未羽ちゃんは赤くなつて固まつた。

僕のこの笑顔に未羽ちゃんが弱いつてこと、薄々気付きながらやつてるんだから僕も結構人が悪いと思う。

「そんなことより、さつき呼び捨てで僕の名前呼んだでしょ? もう一回呼んでよ」

「ええっ、無理ですー。」

「どうして?」

わつまは平然と呼んだじゃない、と囁つと未羽ひやんはたじろいだ。

「 もの、 わつまは勢いで…」

「 今も呼べるつて。ほひ」

ん？と優しく促すけれど、依然彼女は赤くなつて縮こまるばかりだ。

耳とかやばいくらい赤い。

ああびーしょ、 可愛い。

クスクス笑うと、未羽ちゃんが「なんで笑つてるんですかー」と運転する僕の左腕を叩いた。

本当はたいして痛くないくせに痛いよ、と言しながら僕は形容しがたい幸福感に頬をゆるませる。

本当、あの時水をかけに動いた僕の右腕に感謝だ。

それから僕は、頬を膨らます彼女の横顔を盗み見た。

ねえ未羽ちゃん?今僕は君からの話を逸らしたけれどあの時扉が鳴ったのは、本当に心靈現象でもなんでもないんだ。

…だつて。ただ君と初めてまともに会話して、おまけに自分のワイヤツまで貸してあげることになつて。

そのやり場のない気持ちをつい扉にぶつけちゃつただけなんだから。

「末一羽ちゃん」

「…なんですか、もう」

ほらね。余裕なんて、ないだろ?

片思いだつたはずが、両想いで、しかも恋人同士になれて。

それでもまだまだ近づきたといつて思つのは、わがままでしょうか?

《S.i.d.e・櫻末羽》

「あ、意外と広いんですね」

「その分家賃はかかるんだけどねー」

残暑もそろそろ消えそうな九月下旬。あたしは、もう少しで付き合つて一ヶ月になる九条さん宅に遊びに来ていた。

だいぶ渋られたけど、どうしてもと頼むと了承してくれたのだ。

「部屋、綺麗じゃないですか。どうしてあんなに渋つてたんですか  
?」

ソファー、ベッド、テレビ、ローテーブル、フローリングの床。全体的にすつきりとしていて、でもどこか温かみを感じる、そんな家だった。

片付いてるし、割と新しいし、来られるのを嫌がった理由が分からぬ。

「……うん。べつに、そういうふじやなくて……理由は、他にあるから」

珍しく歯切れ悪い九条さんが、ぱつが悪そうに呟く。

あんまり言いたくなかったな、と思つたから、あたしもそれ以上の追及はやめた。

「でも、来れて良かつた」

心からそう言つと、自然に笑みがこぼれる。今日あたしが九条さんの家で遊びたかったのは、その……ある目的があるからだった。

それはズバリ、いちゃいちゃすること。ぶっちゃけ、付き合い始めたはいーけど…九条さんは、まだ手をつなぐ以上のことをしてくれてないのだ。

あたしつてそんな女としてだめ?とか、やつぱりまだ子供だから?とか、正直思うところはいっぱいある。でも、うじうじしてるだけじゃ駄目だから、こうして人目を気にしなくていい家に来たわけだけど。

… わつわから」とある」とおこなうと、あたしと距離を取る九条さん。何なのだろう。今は一人でソファーに座つてこらげど、やつぱり聞こね微妙な距離が空いていた。

「九条さん」

わづかなく近づくと、席を立たれた。

「お茶のおかわつといへるよ」

… なんでも…どうして…そんなことあたしとこるのが嫌?

もつともつと近づきたくて思つのは あたしだけなの?

俯いて膝の上で拳を握ると、手の甲に雫が落ちた。…涙だ。

だめ、ここ泣こむや狡いと悪ひ。だけど、止まらない。

「~~~~~」

堪えきれなかつた嗚咽が漏れる。耳聴く聞き取つた九条さんが、慌ててキッチンからリビングに戻つて來た。

「未羽むやん! なんで泣いてんの? ~

ソファーに座るあたしの正面にしゃがんで、頬に手を伸ばす。だけどそれが触れる前に、あたしは手を振り落つた。

「わへ、わらひで下せこ~!」

彼が目を見開く。

「嫌なんでしょう？ あたしに触れるのが、触れられるのが、嫌なんでしょう？だから… 避けるんですよね？ キスもしてくんないんですね…？ 子どもだから…？ だから駄目なの…？」

ああ駄目だ。もう止まらない。

「あたしは九条さんにもっと近づきたかった。だから家に来たかった。でもこれじゃあ、全然意味がない… 騒いですみませんでした。帰ります」

九条さんの反応を見もしないで、あたしは足元に置いていた鞄をふんだぐると、玄関に向かつて駆け出した はずだった。

「ひ、あやあ…？」

右手に痛みを感じて、視界が反転。気がつけば、ソファーの上に転がされていた。

「えつあれ…」

「 分かんない？」

あたしの足の方に腰掛けて、上半身だけ半分多いかぶせるような格好の九条さんが、苦しそうな顔で呻いた。右手は背もたれにつき、左手はあたしの右手を握ったままで。

「一人きりになる僕の家なんかに来て、一度手を出したら止まらない

くなるかもしれないことが、分かんない？」

「　　」

「僕はそんなに余裕なれば、君だつて子どものことは見えない。だけど未成年なのは事実だ。僕はどうまで許されてる？君にどうまで近づいていいの？」

「…九条さん」

「手をつなぐだけで真っ赤になる君にこれ以上なにかしたら、壊れそうで、触れられない」

…胸がしめつけられた。…そんなこと、考えててくれたんだ…。

愛しさでこゝぱいになる。

知らず知らずのうちに、九条さんの首に両腕を回していた。彼を引き寄せて、耳元で囁く。

「何しても、いいんですよ。九条さんにはもう、そういう権利があります」

笑つて言つと、九条さんが一瞬固まるのが分かつた。

そして、その後

「…」して、あたしはこの家に来た当初の目的を果たすことができた。

後日、学校でひなにあんた見てたの？ってくらうことの経緯を言い当てられるのだけど　それはまた、別の話。

「く、く、く、九条ちゃん？」「今、呟つ…」

「んー？いやだって、未羽ちゃんが誘つから」

「誘つ…？してません…」

「未羽ちゃんの泣き顔は、完全に誘つてくれる」

「なんですかそれえ～」

「だから、絶対他の男の前で泣いちゃ駄目だ。分かった？」

「…っ、はい…」

すひとおりと。未羽と九条と黒瀬ひな。（後書き）

お待たせしましてすいませんでしたm(——)m番外も載せ、これにてこのお話は完全に終了となります。一応分かるようには書いたつもりですが、時系列的には本編 九条さんサイド 未羽サイド ひなサイドになりますね。九条さん視点書きやすかつた(、、)  
ひなは半端なく苦労しました。○rz何考えてるか分かんない奴なんで。ここまで読んで下さった方、ありがとうございました！次回作もよろしくお願ひいたします(\*^\_^\*)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5773f/>

---

彼とあたしとワイシャツと。

2010年11月14日08時54分発行